

九州体育・スポーツ学研究

第34巻 第1号

〈原 著〉

- 大学野球選手の早朝と夕方の疾走パフォーマンスの違い
 …………… 大石祥寛・蔭山雅洋・藤井雅文・前田 明 …………… 1

〈研究資料〉

- 表現系ダンス・リズム系ダンスの「技能評価観点構造図」の提案
 …………… 梶ちか子・松元隆秀・金高宏文 …………… 9

〈九州体育・スポーツ学会第68回大会発表抄録集〉

1. 特別講演 …………… 27
2. 全体シンポジウム …………… 29
3. 第1・第5専門分科会シンポジウム …………… 33
4. 第2・第4専門分科会シンポジウム …………… 35
5. 第3専門分科会シンポジウム …………… 37
6. 研究推進委員会企画テーマ1 …………… 39
7. 研究推進委員会企画テーマ2 …………… 41
8. トピック・セッション1 …………… 43
9. トピック・セッション2 …………… 45
10. ラウンドテーブル・ディスカッション
 「九州体育・スポーツ学会」「九州地区大学体育連合」合同企画 …………… 47
11. スチューデント・セッション …………… 49

- 〈九州体育・スポーツ学会第68回大会報告〉 …………… 51

- 〈事務局ニュース〉 …………… 53

「九州体育・スポーツ学研究」投稿規程

1. 本誌への投稿は、共同研究者も含め原則として九州体育・スポーツ学会会員で、年度会費納入者に限る。但し、編集委員会が必要と認めた場合には、会員以外にも寄稿を依頼することがある。
2. 投稿論文の種類は、総説、原著論文、実践研究、研究資料、短報、研究上の問題提起のいずれかとし、他に投稿中でないものに限る。
3. 投稿論文の掲載可否および掲載時期については、編集委員会において決定する。
4. 本誌に掲載された論文の著作権は、九州体育・スポーツ学会に属する。
5. ヒトを対象とする研究は、ヘルシンキ宣言の精神に沿ったものでなくてはならない。
〔<http://www.med.or.jp/wma/helsinki.html>〕参照
6. 原稿の作成は下記の要領による。
 - 1) 原稿の表紙には、(1) 題目、(2) その論文の内容が主として関係する研究領域、(3) 総説、原著論文、実践研究、研究資料、短報、研究上の問題提起の別を明記する。
 - 2) 和文原稿と英文原稿のいずれも、ワードプロセッサで作成し、A4版縦型横書き、40字30行とする。フォントの大きさは10.5ポイントとし、英文および数値の表記には半角を使用する。なお、計量単位は、原則として国際単位系(SI単位系)とする。
 - 3) 和文原稿には、別紙として、英文による題目と抄録(300語以内)、5語以内のキーワードを添える。さらに、抄録の和文訳と和文キーワードを添付する。
 - 4) 英文原稿には、別紙として、和文による題名と抄録(600字以内)を添付する。
 - 5) 本文、注記、文献、図表の規定ページ数は、原則として、総説30頁以内、原著論文、実践研究、研究資料25頁以内、短報、研究上の問題提起7.5頁以内とする。題目、著者名、所属機関、キーワード、英文抄録及びその和訳については、上記のページ数の上限に含めない。規定ページ数を超過した場合や特殊文字の印刷を必要とする場合は、その実費を投稿者が負担する。
 - 6) 図や表には、通し番号とタイトルをつけ、本文とは別に番号順に一括する。図表の挿入箇所は、本文原稿の行間に、それぞれの番号を朱書きして指示する。挿図は、図中の文字や数字が直接印刷できるように、原則として白黒で鮮明に作成する写真は原則として白黒の鮮明な画面のものとする。なお、カラー図表や写真などで特別な費用を要した場合には、その実費を投稿者が負担する。
 - 7) 文中での文献の記載は、原則として著者・出版年方式(author-date method)とする。また、引用文献は、本文の最後に著者名のABC順に一括し、定期行物の場合の書誌データの表記は、著者名(発行年)論文名、誌名巻(号):ページの順とする。詳細は、(社)日本体育学会「体育学研究」の「投稿の手引き」に準ずる。
((社)日本体育学会ホームページ「<http://taiiku-gakkai.or.jp>」を参照)。
 - 8) 提出する原稿はPDFファイルにし、図表および写真(以下、図表等)は、原稿の最後にまとめて挿入するか、別途、PDFファイルにする。なお、図表等が多い場合には、複数のファイルに分けて投稿してもよい。
 - 9) 提出する原稿は、公正な審査を期すため、謝辞および付記等は原稿受理後に書き加えることとする。
7. 掲載論文の別刷りは、所定の部数を寄贈するが、それ以上の部数を希望する者は、著者校正の際、その必要部数をゲラ刷りの表題のページに明記する。この場合の実費は全額投稿者負担とする。
8. 原稿と図表等のファイルは、九州体育・スポーツ学会事務局にEメールで送付する。なお、Eメールには、氏名、所属機関、連絡先を明記する。

〒889-2192 宮崎県宮崎市学園木花台西1-1 宮崎大学教育学部内

九州体育・スポーツ学会事務局 担当 日高正博

Eメールアドレス:kyutai.office@gmail.com

付 則

本規程は、2008年8月31日より施行する。

(2018年9月15日一部改正)

〈原 著〉

大学野球選手の早朝と夕方の疾走パフォーマンスの違い…………… 1
大石祥寛・蔭山雅洋・藤井雅文・前田 明

〈研究資料〉

表現系ダンス・リズム系ダンスの「技能評価観点構造図」の提案…………… 9
梶ちか子・松元隆秀・金高宏文

〈九州体育・スポーツ学会第68回大会発表抄録集〉

1. 特別講演

障害者スポーツのこれまでとこれから
— 体育・スポーツ経営学の視座 — …………… 27
演 者：武隈 晃（鹿児島大学理事・副学長）
司 会：西谷憲明（鹿児島国際大学）

2. 全体シンポジウム

大学スポーツ協会（UNIVAS）発足で何が変わるか、変わったか？ …………… 29
シンポジスト：池田敦司（仙台大学、（一社）大学スポーツ協会専務理事）
小林勝法（文教大学、（公社）大学体育連合顧問、（一社）大学スポーツ協会理事）
橋本公雄（熊本学園大学）
メインコメンテーター：松下雅雄（鹿屋体育大学学長）
コーディネーター：斉藤篤司（九州大学）
熊谷賢哉（長崎国際大学）

3. 第1・第5専門分科会シンポジウム

コーチングにおける「理論と実践」の往還について…………… 33
演 者：濱田雄仁（鹿児島大学大学院）
沼田薫樹（鹿屋体育大学大学院）
秋山大輔（九州産業大学）
司 会：第1分科会 萩原悟一（鹿屋体育大学）
第5分科会 府内勇希（熊本学園大学）

4. 第2・第4専門分科会シンポジウム

第1部 田口正公先生、田中宏暁先生を偲んで…………… 35
演 者：高瀬幸一（名桜大学）
西田裕一郎（佐賀大学）
司 会：田原亮二（西南学院大学）
東恩納玲代（名桜大学）
第2部 自然科学系論文の執筆術…………… 36
演 者：道下竜馬（福岡大学）
司 会：田原亮二（西南学院大学）
東恩納玲代（名桜大学）

5. 第3専門分科会シンポジウム

小学校体育における「主体的・対話的で深い学び」に向けて…………… 37
演 者：當房省吾（鹿児島大学教育学部附属小学校教諭）
木村翔太（東京学芸大学附属世田谷小学校教諭）
松本大輔（西九州大学）
司 会：黒原貴仁（鹿児島女子短期大学）

6. 研究推進委員会企画テーマ1

「子どもの行為に基づいた運動遊び展開モデル」を媒体にした保幼小接続に関する事例研究 …………… 39
西田明史（西九州大学短期大学部）
松本大輔（西九州大学）

7. 研究推進委員会企画テーマ2	
高校体育授業における投動作改善を目的とした授業実践……………	41
村上光平（鹿屋体育大学大学院）	
前田 明（鹿屋体育大学）	
8. トピック・セッション1	
地域住民の健康への大学の貢献……………	43
— 沖縄の長寿復活に向けたユニークな健康支援 —	
演 者：高瀬幸一（名桜大学）	
企画・司会：中垣内真樹（鹿屋体育大学）	
9. トピック・セッション2	
学生の実践的指導力を高める具体的な授業取組……………	45
演 者：高原和子（福岡女学院大学）	
西田明史（西九州大学短期大学部）	
企画・司会：第3専門分科会自主企画（世話人：西田明史・松本大輔）	
10. ラウンドテーブル・ディスカッション	
「九州体育・スポーツ学会」「九州地区大学体育連合」合同企画	
「教養体育」授業担当資格の認定に向けて……………	47
話 題 提 供：則元志郎（熊本大学名誉教授）	
企画・司会：則元志郎（九州地区大学体育連合顧問）	
斉藤篤司（九州体育・スポーツ学会大会企画委員長）	
11. スチューデント・セッション	
ボードゲームを活用した集中力のトレーニング……………	49
話題提供者：河津慶太（九州大学大学院 学術協力研究員）	
企画・司会：相羽枝莉子（九州大学大学院・北九州市立大学）	
斉藤篤司（九州大学）	
〈九州体育・スポーツ学会第68回大会報告〉……………	51
大会実行委員長 西谷憲明（鹿児島国際大学）	
〈事務局ニュース〉……………	53

大学野球選手の早朝と夕方の 疾走パフォーマンスの違い

大石 祥 寛 (宮崎学園短期大学保育科)
蔭山 雅 洋 (日本スポーツ振興センター)
藤井 雅 文 (鹿屋体育大学大学院)
前田 明 (鹿屋体育大学スポーツパフォーマンス研究センター)

Differences in sprint performance of collegiate baseball players between the early morning and evening

Yoshihiro Oishi¹⁾, Masahiro Kageyama²⁾, Masafumi Fujii³⁾ and Akira Maeda⁴⁾

Abstract

The purpose of this study was to clarify differences in sprint performance of collegiate baseball players between early morning and evening. Thirty-seven collegiate baseball players voluntarily participated in a 30-m maximal sprint running test and jump performance tests (i.e., brief squat jump: SJ, countermovement jump: CMJ, and rebound jump: RJ) in the early morning and evening. The rebound jump index (RJ-index) was calculated by dividing the jump height by the contact time. The split time at every 5 m during the 30-m sprint test was measured using an electronic timing system. Resting oral temperature was measured using a digital oral thermometer before beginning each warm-up and test session. The 30-m sprint time in the early morning was significantly slower than that in the evening. There was no significant time-of-day × interval interaction in the split times. However, there were significant main effects of both time-of-day and interval in the split times. The oral temperature, SJ, CMJ, and RJ-index in the early morning were significantly lower than those in the evening. These results suggest that sprint performance in the early morning is lower than that in the evening. Therefore, it was assumed important for these athletes to improve anaerobic power in the lower limbs in order to improve sprint performance in the morning.

Key words: jump performance, oral temperature, diurnal variation

I. 緒言

野球は幅広い年代、競技レベルで実施されており、トレーニングや試合の時間帯も様々である。プロ野球では夜の時間帯（例えば、18時ごろから22時ごろまで）に試合が実施されることが多いため、正午過ぎから夕方にかけてトレーニングが実施されている。一方で、アマチュア野球では午前の早い時間帯から試合が行われることも

ある。それゆえ、アマチュア野球選手は早朝から夕方まで時間を問わず高いパフォーマンスを有することが重要となる。

異なる時間帯におけるスポーツパフォーマンスは、体温の概日リズム、筋収縮特性、トレーニング習慣などが影響する。筋収縮特性に着目した研究によると、ウィングテストの平均パワーおよびピークパワー (Souissi et al., 2007)、スクワットジャンプ (Squat Jump, 以下

1) Department of Nursery, Miyazaki Gakuen Junior College, 1415 Kanouhei, Kiyotake, Miyazaki, Miyazaki 889-1605

2) Japan Sport Council, 3-5-1 Nishigaoka, Kita-ku, Tokyo 115-0056

3) Graduate School of Physical Education, National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, 1 Shiromizu-cho, Kanoya, Kagoshima 891-2393

4) Sports Performance Research Center, National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, 1 Shiromizu-cho, Kanoya, Kagoshima 891-2393

「SJ」と略す) およびカウンタームーブメントジャンプ (Counter Movement Jump, 以下「CMJ」と略す) の跳躍高 (Chtourou et al., 2012a; Racinais et al., 2004), 自転車でのスプリント能力 (Zarrouk et al., 2012) のいずれも, 朝のパフォーマンスが夕方のパフォーマンスより低いことが報告されている。また, 女子ハンドボール選手の朝の疾走能力に着目した研究 (Mhenni et al., 2017) によると, 方向転換を伴う疾走パフォーマンスは, 朝が夕方に比べて有意に低いことが報告されている。このような夕方のパフォーマンスが朝より高い要因として, 夕方に高値を示す体温が間接的にウォーミングアップ効果として働くことに起因する可能性 (Racinais et al., 2004; Mhenni et al., 2017) や, 朝より午後の方が良いという筋収縮特性による力発揮が影響する可能性 (Martin et al., 1999; Mhenni et al., 2017; Zarrouk et al., 2012) があげられる。一方で, 水泳選手の200m泳タイムトライアルに関して, 日常的に朝にトレーニングを実践している水泳選手14名のうち10名が夕方より朝のパフォーマンスが優れていたことから, 朝の低体温が必ずしもパフォーマンスに影響しないこと, および日常的な朝のトレーニングが朝のパフォーマンスを高める可能性があるとの報告もある (Rae et al. 2015)。これらの先行知見より, 異なる時間帯のスポーツパフォーマンスには, 体温の概日リズム, 筋収縮特性, トレーニング習慣などの競技特性が影響するため, 野球選手においても早朝と夕方とではパフォーマンスが異なる可能性が考えられる。

野球では, 疾走能力が優れていれば, 攻撃場面においては打者の出塁率や走者の進塁率が高くなり, 多くの得点機会が期待できる。野球選手の疾走能力に着目した先行研究 (Coleman and Amonette, 2012; 蔭山ほか, 2016) では, 本塁から一塁までの塁間走あるいは打撃後の一塁駆け抜け・盗塁を想定した直線走 (塁間走) から野球選手の疾走能力の特徴について検討されてきた。大学野球選手を対象に, 疾走タイムの違いから塁間走が速い選手の特徴を検討した蔭山ほか (2016) の研究によると, 塁間走タイムが優れている者は, スタート直後から高い疾走速度を獲得することが報告されている。また, Coleman and Amonette (2012) によると, 本塁から一塁までの塁間走タイムには, 本塁からファールライン (13.7m) までの疾走タイムが大きく影響すると報告されている。これらの先行知見より, 野球ではスタート直後に高い疾走速度を獲得する必要があり, 個人間のみならず個人内においてもスタート直後の疾走速度が高いことは重要となると考えられる。したがって, 野球選手の早朝と夕方の疾走パフォーマンスの違いを明らかにすることは, 朝早くから実施される試合場面やトレーニング場

面におけるパフォーマンスを高く維持するための基礎的資料になると考えた。

そこで本研究では, 野球選手の疾走の特徴を評価する際に用いられている30m走に着目し, 早朝と夕方の疾走パフォーマンスの違いを明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. 対象者

対象者は大学野球選手37名 (年齢: 19.7 ± 3.6 歳, 身長: 173.2 ± 10.2 cm, 体重: 71.3 ± 5.8 kg) であった。対象者には予め, 日本語版朝型-夜型質問紙 (MEQ) (石原ほか, 1986) を記入してもらい, 日周指向性を評価した。対象者37名のMEQスコアの平均値と標準偏差は, 50.0 ± 7.1 点であり, 「ほぼ夜型」が2名, 「中間型」が31名, 「ほぼ朝型」が3名, 「明らかな朝型」が1名であった。「明らかな夜型」を示す対象者は存在しなかった。本研究における対象者の日周指向性は, パフォーマンスの日内変化を明らかにした先行研究 (Zarrouk et al., 2012) における対象者の日周指向性 (49.8 ± 5.1 点) と同等であった。なお, 対象者は某大学硬式野球部に所属する選手であり, 平日の練習は16:00-20:30の時間帯で週4日実施し, 土日および祝日の練習は8:30-16:00で実施していた。

本研究は筆頭著者が所属する機関の倫理審査委員会の承諾を受けた。対象者には事前に本研究の目的や, 測定内容および測定時の危険性について十分な説明を行ったうえで, 書面にて研究協力の同意を得た。

2. 実験の手順

本研究では, 早朝の測定は6:30-8:00, 夕方の測定は18:00-19:30に実施した。結果に対する測定の順序および測定日の影響を小さくするため, 早朝に測定を実施してその日の夕方に測定を実施する対象者, 早朝の測定を実施した翌日以降の夕方に測定を実施する対象者, 夕方の測定を実施した翌々日以降の早朝に測定を実施する対象者にランダムに分け, 早朝と夕方の測定を実施した。

対象者は, 各々の時間帯において, 始めに婦人体温計 (WOMAN[®]C, テルモ社製) を用いて安静時での口腔温を測定した。その後, ウォーミングアップを実施した上で, それぞれのパフォーマンステストを実施した。ウォーミングアップは, 各々の対象者が内容を決定して実践するものとし, 対象者には「最大のパフォーマンスを発揮できるように十分なウォーミングアップを行う」ように指示した。パフォーマンステストは, 30m走と後述する3種目のジャンプテストで構成し, 測定の順は対象者毎にランダムとした。

先行研究 (Zarrouk et al., 2012) にならい, 飲食物によ

る興奮作用や運動実践による疲労，更に前日の睡眠の影響を受けないようにするために，対象者には測定日前日の夜のアルコールおよびカフェインを含む飲料の摂取と，測定24時間前からの激しい運動実践を禁止するように，また，測定前日は6時間以上の睡眠を取るよう指示をした。

3. パフォーマンステスト

(1) 30m走

30m走の測定は，室内練習場にて行った。対象者は，走方向に向かって左90度に身体を向けた野球のリードの姿勢から任意のタイミングで疾走を開始した。疾走タイムは，無線型ワイヤレス光電管システム (Brower Timing System, USA) を用いて，1/100秒単位で計測した。なお，30m走中の疾走速度を算出するために本研究では，5m区間毎に光電管システムを設置した。30m走は十分な休息を挟んで2回ずつ実施し，30m走タイムが速い試行を採用した。

(2) ジャンプパフォーマンス

SJ, CMJ, リバウンドジャンプ (Rebound Jump, 以下「RJ」と略す) の3種目を実験室内にて実施した。これらのジャンプパフォーマンスの測定値は，疾走パフォーマンスとの関連性が認められており (岩竹, 2017; 蔭山ほか, 2016; Nagahara et al., 2014), また，ジャンプ測定時に観察される下肢パワー値が疾走パフォーマンスと同様に野球特有のパフォーマンスとして評価できることが示されている (Hoffman et al., 2009; 蔭山ほか, 2016)。一般的にSJ, CMJは鉛直方向のパワーの指標として用いられており (Lockie et al., 2012; Thun et al., 2015), SJは足関節，膝関節，股関節における短縮性収縮による力発揮が一樣に貢献するのに対して，CMJは股関節における力発揮の貢献度が大きく (深代, 2017), 運動遂行時間が長い伸張-短縮サイクル (以下「SSC」と略す) 運動が関連する (Flanagan and Comyns, 2008; Smirniotou et al., 2008)。一方，RJは運動遂行時間が短いSSC運動が関連しており (Flanagan and Comyns, 2008; Smirniotou et al., 2008), 足関節による影響が高い (深代, 2017)。これらのことから，本研究で用いたSJ, CMJ, RJは，野球選手のパフォーマンスを評価する指標であるとともに，早朝と夕方の疾走パフォーマンスの違いを検討するうえで有効な指標となり得ると考えた。

SJおよびCMJは，腰に手を当てた状態での試行とし，SJでは膝関節角度を90度に保持した状態から試行を開始し，CMJでは立位姿勢から試行を開始した。SJおよびCMJによる跳躍高は，マットスイッチ (マルチジャンプ

テスト, DKH社製) によって計測された滞空時間を基に次式を用いて算出した: 跳躍高 (cm) = $1/8gt^2$ (g : 重力加速度 9.81m/s^2 , t : 滞空時間)。RJは，連続6回のリバウンドジャンプを行い，対象者にはできる限り踏切時間を短く，且つ，できる限り跳躍を高くするように指示をした。リバウンドジャンプ指数 (以下「RJ-index」と略す) は，先行研究 (Miura et al., 2010) にならい，跳躍高を接地時間で除すことで算出した。6回の跳躍で得られたRJ-indexのうち，最も高い値が得られたRJ-indexを採用した。

いずれのジャンプテストも十分な休息を挟んで実施し，対象者が十分に跳躍できたと自覚した2回の試行のうち高い値を採用した。

(3) 30m平均疾走速度・CMJ比

スポーツパフォーマンスには体力要因と技術要因の2つが関与している。そのため，それぞれの運動で優れた成績をあげるには，それぞれに要求されるエネルギーを出す能力に優れているのみでなく，出し得たエネルギーを使う能力にも優れていることが要求される (金原, 1978)。そして，トレーニングにより高められた体力を最大限に生かし，高いパフォーマンスに結び付けるためには合理的な技術が要求される (尾縣・中野, 1991) ことも述べられている。本研究では，疾走パフォーマンスと高い関係性があるとされるCMJを体力要因である下肢のパワー発揮能力として位置づけ，30m平均疾走速度 (Sprint velocity, 以下「SV」と略す) とCMJの比 (以下「SV・CMJ比」と略す) を用いることで，個人の有する下肢パワー発揮能力の中でどれくらいの疾走パフォーマンスを発揮することができるのかを評価した。具体的には，対象者の早朝と夕方のSVおよびCMJのパフォーマンスの平均値をそれぞれ求め，37名の平均値および標準偏差から早朝と夕方のそれぞれのパフォーマンスの偏差値を求めた (式1)。

$$\text{SV} \cdot \text{CMJ比} = \text{SVの偏差値} \times \text{CMJの偏差値}^{-1} \quad (\text{式1})$$

このSV・CMJ比が高い場合は，平均疾走速度が下肢のパワー発揮能力よりも優位であり，SV・CMJ比が低い場合は，平均疾走速度が下肢のパワー発揮能力よりも劣位であると解釈できる。

4. 統計処理

得られたデータは平均値±標準偏差で示した。30m走タイム，口腔温，SJ, CMJ, RJ-index, SV・CMJ比における早朝と夕方の値の比較には，対応のあるStudentのt検定を用いた。30m走中の5m区間毎の疾走速度については，2要因 (時間帯×区間) の分散分析を用いて交

相互作用および主効果を検証した。交互作用および主効果が認められた場合は Bonferroni の多重比較検定を行った。早朝の SV・CMJ 比と夕方の SV・CMJ 比の関係性については Pearson の積率相関係数を算出した。本研究では有意水準を 5%未満とした。なお、すべての検定は統計処理ソフト IBM SPSS Statistics 23 (IBM 社) を用いた。

III. 結果

1. 30m走タイム

30m走タイムは、早朝が夕方より有意に遅い値を示した ($p<0.01$) (表1)。

2. 口腔温, SJ, CMJ, RJ-index

口腔温, SJ, CMJ, RJ-index はいずれも、早朝が夕方より有意に低い値を示した ($p<0.01$) (表1)。

表1 早朝と夕方の30m走タイム, 口腔温, SJ, CMJ, RJ-index, SV・CMJ比

項目	早朝	夕方
30 m走タイム(秒)	4.46 ± 0.17	4.39 ± 0.16 **
口腔温 (°C)	36.2 ± 0.3	36.9 ± 0.2 **
SJ (cm)	38.5 ± 4.6	40.7 ± 5.5 **
CMJ (cm)	41.8 ± 4.9	44.7 ± 5.2 **
RJ-index	2.27 ± 0.42	2.41 ± 0.46 **
SV・CMJ比	1.03 ± 0.21	1.00 ± 0.19

平均値 ± 標準偏差

** $p<0.01$: 早朝 vs 夕方

3. 30m走時の疾走速度

2要因の分散分析の結果、疾走速度には有意な交互作用 (時間帯 × 区間) が認められなかったが、区間の主効果 ($F(5, 32) = 1395.04, p<0.01, \eta_p^2 = 0.975$) および時間帯の主効果 ($F(1, 36) = 38.46, p<0.01, \eta_p^2 = 0.517$) は有意であった (図1)。区間毎の疾走速度を多重比較した結果、20-25m区間と25-30m区間には有意な差が認められなかったが、0-5m区間から20-25m区間までの疾走速度の有意な増大が認められた ($p<0.01$)。

4. SV・CMJ比

SV・CMJ比は、早朝が 1.03 ± 0.21 (SV: 47.9 ± 10.4 , CMJ: 47.1 ± 9.9)、夕方が 1.00 ± 0.19 (SV: 52.1 ± 10.0 , CMJ: 52.9 ± 10.5) であり、早朝と夕方の値に有意な差は認められなかった (表1)。また、早朝の SV・CMJ 比と夕方の SV・CMJ 比は高い相関が認められた ($r=0.835, p<0.01$)。

IV. 考察

1. 野球選手の早朝と夕方の疾走パフォーマンスの違い

本研究の大学野球選手における30m走タイムは、早朝が夕方より遅かった (表1)。先述したように、女子ハンドボール選手における方向転換を伴う疾走パフォーマンスは、朝が夕方に比べて有意に低いこと (Mhenni et al., 2017) が報告されている。本研究は先行研究 (Mhenni et al., 2017) を支持するものであり、野球選手の疾走パフォーマンスにおいても朝は夕方よりも低いことが明らかとなった。また、本研究では、早朝と夕方における5m毎の疾走速度で交互作用 (時間帯 × 区間) が認められ

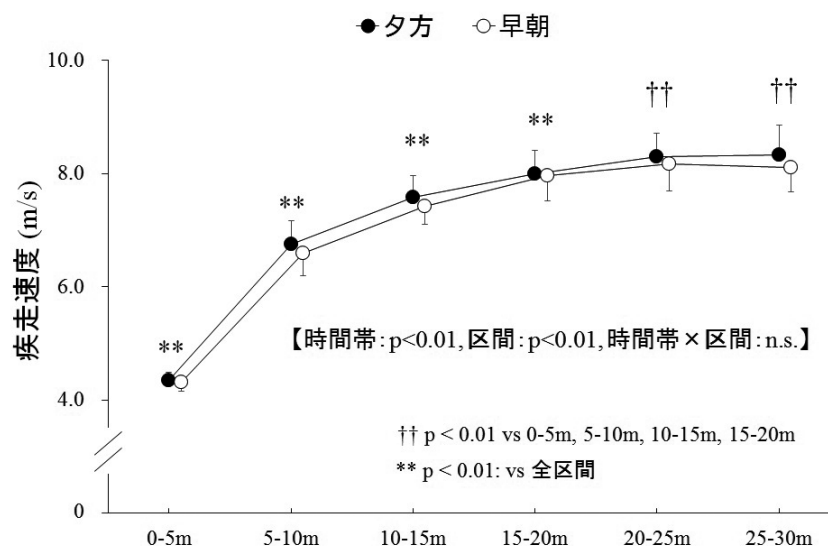


図1 早朝と夕方の5m区間毎の疾走速度
【 】内は主効果と交互作用の有意水準を示す。n.s.: not significant

なかったものの、時間帯の主効果が認められた(図1)。この結果は、すべての区間において早朝は夕方よりも低い疾走速度で疾走していたことを意味する。また、早朝および夕方の30m走中の疾走速度がスタートしてから20mまで増大を示しており、このことは大学野球選手の疾走パフォーマンスの特徴を明らかにした先行研究(蔭山ほか, 2016)と同様の結果であった。したがって、大学野球選手の早朝と夕方の疾走パフォーマンスを比較すると、30m走時の疾走速度が20mまで増大するという特徴に違いはないものの、疾走区間全体を通して早朝が夕方より疾走速度が遅いという違いが存在すると考えられる。以下では、疾走パフォーマンスにおける早朝と夕方の違いについて考察する。

すべてのジャンプパフォーマンスおよび口腔温は、早朝が夕方よりも低値であった(表1)。SJ, CMJに関してはこれまで、朝が夕方より低いことが明らかとなっており(Chitourou et al., 2012a; Racinais et al., 2004)。本研究結果は先行研究を支持するものであった。Racinais et al. (2004)によると、SJおよびCMJは体温の概日リズムが影響しており、体温がウォーミングアップ効果として働くためにジャンプパフォーマンスは夕方が朝より高いとされている。また、ジャンプパフォーマンスの日内差と関連性が高い要因として、中枢神経支配よりもむしろ筋収縮特性の日内差であることが示唆されている(Chitourou et al., 2012a)。これらの先行知見より、野球選手においても早朝のジャンプパフォーマンスが夕方よりも低い要因として、早朝が夕方より体温が低いことや、早朝が夕方より筋収縮特性が劣っていること、あるいはその両方に起因した可能性が考えられる。大学陸上短距離選手を対象としたNagahara et al. (2014)の研究によると、60m走タイムは、SJおよびCMJとの間に関連性が認められたとされている。また大学野球選手を対象とした蔭山ほか(2016)の研究においても、30m走タイムは、CMJおよびRJ-indexとの間に関連性が示されたと報告されている。そして、高い疾走速度を獲得するには、選手に対して相対的に後方に動く地面に対していかに短時間に大きな加速力を発揮できるかが重要であること(福田と伊藤, 2004)が報告されている。これらの先行知見より、疾走パフォーマンスには脚伸展を伴う跳躍能力が高い関連性を示すため、早朝の疾走パフォーマンスの低調には、体温が低く、筋収縮特性が劣っているという早朝の生理学的特性に起因する短時間での下肢パワー発揮能力の低調が影響していたものと考えられる。

本研究では、選手個人が有する下肢パワー能力の中で、どれくらいの疾走パフォーマンスを発揮できるのかを評価するためにSV・CMJ比を求めた。早朝と夕方の

SV・CMJ比に有意な差が認められなかったことは、下肢パワー発揮能力に対する疾走パフォーマンス発揮に早朝と夕方で差がなかったことを意味する。早朝と夕方のSV・CMJ比に高い関連性が認められたこと($r=0.835$)を踏まえると、大学野球選手の疾走パフォーマンスの特徴として、夕方の疾走パフォーマンスが下肢のパワー発揮能力よりも優位である選手は早朝時も同様に疾走パフォーマンスが下肢パワー発揮能力より優位であり、夕方の疾走パフォーマンスが下肢パワー発揮能力よりも劣位である選手は、早朝においても同様の傾向を示すこと、そして、疾走パフォーマンスとCMJの優劣の関係性は早朝と夕方で変わらないことが考えられる。パフォーマンスには、トレーニングにより高められた体力を最大限に生かし、高いパフォーマンスに結び付けるための合理的な技術が要求される(尾縣・中野, 1991)ため、早朝の疾走パフォーマンスの低調には、早朝の下肢パワー発揮能力が夕方よりも低いことが影響しているものと考えられる。今後は、疾走速度の決定要因であるピッチとストライド、疾走速度に直接関連する疾走時の地面反力や力積、或いは、3次元動作解析を行うことで、疾走パフォーマンスの早朝と夕方の違いの具体的な要因が明らかになるだろう。

2. 指導現場への示唆

大学野球選手の早朝の疾走パフォーマンスは夕方に比べて低いいため、朝の時間帯に試合或いはトレーニングが実施される場合では、最大限のパフォーマンスを発揮するためのコンディショニングがより重要となる。コンディショニングとは、ピークパフォーマンスの発揮に必要なすべての要因を、ある目的に向かって望ましい状態に整えること(石山, 2013)とされている。一般的に、体温、血圧、心臓機能などの生理機能は、概日時計による影響を受けているため、朝が一日の中でも最も低値を示すことが知られている(本間, 2012; Martino and Young, 2015)。さらに、筋力や柔軟性(Gifford, 1987)、バランス機能(Heinbaugh et al., 2015)も朝が低く、スポーツパフォーマンスには概日リズムが存在することが示されている(Drust et al., 2005; Reilly and Waterhouse, 2009)。そのため、最大限のパフォーマンスを発揮するためのコンディショニングとして、実際にパフォーマンスを発揮する時間帯でのトレーニングの継続が重要となるだろう。

早朝のパフォーマンスは、日常的に早朝にトレーニングを実践している水泳選手の方が夕方に実践している水泳選手よりも高いこと(Rae et al., 2015)や、8週間の朝のストレングストレーニングによって朝の時間帯のジャ

ンプパフォーマンスが特異的に向上したこと (Chtourou et al. 2012a) が報告されていることから、野球選手の早朝の疾走パフォーマンスを高く維持するには、継続的に早朝のトレーニングを含めたコンディショニングを実践することが重要であると考えられる。

本研究における早朝および夕方の疾走パフォーマンスはいずれも選手が発揮したその時間帯の最大のパフォーマンスであり、その中で、早朝と夕方のSV・CMJ比に差がないという結果が得られた。この結果は、早朝の疾走時は、下肢のパワー発揮能力が低い状態にあることにより疾走パフォーマンスが低かったことを示す。そのため、早朝の疾走パフォーマンスを更に高めるためには筋機能および関節運動によるパワー発揮を高めることが有益であると考えられる。朝の下肢パワー発揮能力を高めるための方法として朝のトレーニングが挙げられる。先行研究によると、朝のレジスタンストレーニングを週に3回12週間継続することが、朝の最大随意筋力を高めることに働きかける可能性が示されている (Chtourou et al., 2012b)。そのため、朝の疾走トレーニングは朝の疾走パフォーマンスを向上させるかもしれない。さらに、野球選手の下肢パワー向上による疾走改善について、高強度のレジスタンストレーニングに加えてプライオメトリックトレーニングの複合トレーニングを4週間継続することが、野球選手の疾走速度を向上させることが示されている (Dodd and Alvar, 2007)。したがって、早朝の疾走パフォーマンスの改善には、特有の力・パワー発揮の向上を目的とした短・中期的な朝のトレーニングの実践が効果的かもしれない。

よって、野球の指導現場では、早朝の下肢のパワーを高めるコンディショニングを実践することで、早朝の疾走パフォーマンスが高まり、朝の試合や朝のトレーニングがより充実したものになることが期待される。

3. 研究の限界と今後の課題

本研究では、測定の手続きおよび実施日を区別せずに早朝と夕方のパフォーマンスの差異を検討したが、測定の手続きおよび実施日の違いによる影響が考えられるため、早朝と夕方のパフォーマンスにおける具体的な差の程度を明らかにするためには、同じ対象者がそれぞれの測定を対象者毎にランダムに行うというデザイン (クロスオーバー法) を用いることが最良であるだろう。

また、本研究では選手は皆が同じ時刻の測定に合わせ起床し、パフォーマンス測定に参加した。選手それぞれに個体特有の睡眠覚醒リズムが存在する (北村, 2014) ため、それがパフォーマンスに影響を与える可能性が考えられる。そのため、今後は選手の日周指向性別

に早朝と夕方の疾走パフォーマンスの違いを検討することで、選手の特性を考慮した上でのコンディショニング方法が確立されるだろう。

V. まとめ

本研究は、大学野球選手を対象とし、早朝と夕方の疾走パフォーマンスの違いを明らかにすることを目的とした。その結果、以下のことが明らかとなった。

- 1) 30m疾走タイムは早朝が夕方より有意に遅く、疾走速度は5m毎の区間のすべてにおいて早朝が夕方より低かった。
- 2) 口腔温, SJ, CMJ, RJ-index は、早朝が夕方より有意に低かった。
- 3) 30m平均疾走速度・CMJ比は、早朝と夕方で有意な差がなかった。

したがって、野球選手の早朝の疾走パフォーマンスは夕方よりも低く、早朝時の下肢のパワー発揮能力が低いという特徴が疾走パフォーマンスの日内差に影響を与えたものと考えられた。このことから、野球選手の早朝の疾走能力を高めるためには、早朝の下肢のパワーを高めることが重要であると考えられた。

VI. 文献

- Chtourou, H., Driss, T., Souissi S., Gam A., Chaouachi A., and Souissi N. (2012a) The effect of strength training at the same time of the day on the diurnal fluctuations of muscular anaerobic performances. *J. Strength Cond. Res.*, 26: 217-225.
- Chtourou, H., Chaouachi, A., Driss, T., Dogui, M., Behm, D.G., Chamari, K., and Souissi, N. (2012b) The effect of training at the same time of day and tapering period on the diurnal variation of short exercise performances. *J. Strength Cond. Res.*, 26: 697-708.
- Coleman, A.E. and Amonette, W.E. (2012) Pure acceleration is the primary determinant of speed to first-base in major-league baseball game situations. *J. Strength Cond. Res.*, 26: 1455-1460.
- Dodd, D.J., and Alvar, B.A. (2007) Analysis of acute explosive training modalities to improve lower-body power in baseball players. *J. Strength Cond. Res.*, 21: 1177-1182.
- Drust, B., Waterhouse, J., Atkinson, G., Edwards, B., and Reilly, T. (2005) Circadian rhythms in sports performance-an update. *Chronobiol. Int.*, 22: 21-44.
- Flanagan, E.P. and Comyns, T.M. (2008) The use of contact time and the reactive strength index to optimize fast stretch-shortening cycle training. *Strength Cond. J.*, 30

- (5): 32-38.
- 深代千之 (2017) 瞬発性運動におけるパワー評価. 体育の科学, 67: 221-225.
- 福田厚治, 伊藤章 (2004) 最高疾走速度と接地期の身体重心の水平速度の減速・加速: 接地による減速を減らすことで最高疾走速度は高められるか. 体育学研究, 49: 29-39.
- Gifford, L.S. (1987) Circadian variation in human flexibility and grip strength. *Aust. J. Physiother.*, 33: 3-9.
- Heinbaugh, E.M., Smith, D.T., Zhu, Q., Wilson, M.A., and Dai, B. (2015) The effect of time-of-day on static and dynamic balance in recreational athletes. *Sports Biomech.*, 14: 361-373.
- Hoffman, J.R., Vazquez, J., Pichardo, N., and Tenenbaum, G (2009) Anthropometric and performance comparisons in professional baseball players. *J. Strength Cond. Res.*, 23: 2173-2178.
- 本間さと (2012) 脊椎動物の概日リズム 4章 主時計-視交叉上核を中心に-. 時間生物学. 海老原史樹文, 吉村崇編. 化学同人, pp.55-66.
- 石原金由, 宮下彰夫, 犬上牧, 福田一彦, 山崎勝男, 宮田洋 (1986) 日本語版朝型-夜型 (Morningness-Eveningness) 質問紙による調査結果. *心理学研究*, 57: 87-91.
- 石山修盟 (2013) コンディショニングの把握と管理. (公財) 日本体育協会編. 公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト第6巻 予防とコンディショニング (第8版). 日本体育協会, pp.6-24.
- 岩竹淳 (2017) 疾走能力に対するリバウンドジャンプ能力の位置づけ. 体育の科学, 67: 232-237.
- 藍山雅洋, 藤井雅文, 土川千尋, 鈴木智晴, 前田明 (2016) 大学野球選手における30m走タイムと跳躍能力との関係. *トレーニング科学*, 27: 93-100.
- 金原勇 (1978) 運動技術の本質. 体育原理研究会編. 体育における体力論・技術論 (体育の原理第5号) (第5版). 不昧堂, p.106.
- 北村真吾 (2014) 概日リズム機能に見られる個体差. *日本生理人類学会誌*, 19: 283-290.
- Lockie R.G., Murphy A.J., Schultz A.B., Knight T.J., and Janse de Jonge X.A.K. (2012) The effects of different speed training protocols on sprint acceleration kinematics and muscle strength and power in field sport athletes. *J. Strength Cond. Res.*, 26: 1539-1550.
- Martin, A., Carpentier, A., Guissard, N., van Hoecke, J., and Duchateau, J. (1999) Effect of time of day on force variation in a human muscle. *Muscle Nerve.*, 22: 1380-1387.
- Martino, T.A. and Young, M.E. (2015) Influence of the cardiomyocyte circadian clock on cardiac physiology and pathophysiology. *J. Biol. Rhythms*, 30: 183-205.
- Mhenni, T., Michalsik, L.B., Mejri, M.A., Yousfi, N., Chaouachi, A., Souissi, N., and Chamari, K. (2017) Morning-evening difference of team-handball-related short-term maximal physical performances in female team handball players. *J. Sports Sci.*, 35: 912-920.
- Miura, K., Yamamoto, M., Tamaki, H., and Zushi, K. (2010) Determinants of the abilities to jump higher and shorten the contact time in a running 1-legged vertical jump in basketball. *J. Strength Cond. Res.*, 24: 201-206.
- Nagahara, R., Naito, H., Miyashiro, K., Morin, J.B., and Zushi, K. (2014) Traditional and ankle-specific vertical jumps as strength-power indicators for maximal sprint acceleration. *J. Sports Med. Phys. Fitness.*, 54: 691-699.
- 尾縣貢, 中野正瑛 (1991) 疾走能力に影響を及ぼす動作要因. *奈良教育大学紀要*, 4 (2): 21-28.
- Racinais, S., Hue, O., and Blonc, S. (2004) Time-of-day effects on anaerobic muscular power in a moderately warm environment. *Chronobiol. Int.*, 21: 485-495.
- Rae, D.E., Stephenson, K.J., and Roden, L.C. (2015) Factors to consider when assessing diurnal variation in sports performance: the influence of chronotype and habitual training time-of-day. *Eur. J. Appl. Physiol.*, 115: 1339-1349.
- Reilly, T. and Waterhouse, J. (2009) Sports performance: is there evidence that the body clock plays a role? *Eur. J. Appl. Physiol.*, 106: 321-332.
- Smirniotou, A., Katsikas, C., Paradisis, G., Argeitaki, P., Zacharogiannis, E., and Tziortzis, S. (2008) Strength-power parameters as predictors of sprinting performance. *J. Sports Med. Phys. Fitness.*, 48: 447-454.
- Souissi, N., Bessot, N., Chamari, K., Gauthier, A., Sesboüé, B., and Davenne, D. (2007) Effect of time of day on aerobic contribution to the 30-s Wingate test performance. *Chronobiol. Int.*, 24: 739-748.
- Thun, E., Bjorvatn, B., Flo, E., Harris, A., and Pallesen, S. (2015) Sleep, circadian rhythms, and athletic performance. *Sleep Med. Rev.*, 23: 1-9.
- Zarrouk, N., Chtourou, H., Rebai, H., Hammouda, O., Soussi, N., Dogui, M., and Hug, F. (2012) Time of day effects on repeated sprint ability. *Int. J. Sports Med.*, 33: 975-980.

(平成31年2月7日受付)
(令和元年5月27日受理)

表現系ダンス・リズム系ダンスの 「技能評価観点構造図」の提案

梶 ちか子 (鹿屋体育大学)

松 元 隆 秀 (鹿屋体育大学)

金 高 宏 文 (鹿屋体育大学)

Proposal of “skill evaluation viewpoint structure diagram” on skill evaluation points of creative dance and rhythm dance

Chikako Kakoi, Takahide Matsumoto and Hirofumi Kintaka

Abstract

This study aimed to propose a diagram structurizing the skill evaluation viewpoint (“skill evaluation viewpoint structure diagram”), required for creative dance and rhythmic dance. The “skill evaluation viewpoint structure diagram” was developed by the following processes: 1) preparing a proposal for “skill evaluation viewpoint structure diagram (draft)” based on 10 aspects of Yamazaki et al. (2014) and contents of “skill” of course of study guidance, 2) verification of acceptability of “skill evaluation viewpoint structure diagram (draft)” by interview surveies to dance experts and physical education teachers who work at wach of elementary, junior high and high schools and preparation of amendment plan of “skill evaluation viewpoint structure diagram (draft)”, and 3) creation of “skill evaluation viewpoint structure diagram” modified based on opinions from teachers who participated in a dance workshop.

As a result, the “skill evaluation viewpoint structure diagram (draft)” of creative dance and rhythmic dance was modified on the basis of the relations of each keywords relating to the evaluation viewpoints obtained from interview surveies to dance experts and physical education teachers. Furthermore, “skill evaluation viewpoint structure diagram” was created on the basis of the opinions obtained from in-service teachers,.

Key words: skill evaluation point, school physical education, skill evaluation viewpoint structure diagram

I. 緒 言

平成20年3月告示の学習指導要領(文部科学省, 2008a; 2008b)では, 発達段階に応じた指導内容の明確化・体系化が重視され, 「表現運動系・ダンス」領域(以下, 「ダンス系」領域)においても, 「技能」「態度」「思考・判断(小学校)／知識, 思考・判断(中学校・高等学校)」それぞれについて, 具体的かつ詳細に示された。特に「技能」に関しては, 「表現・創作ダンス(以下, 「表現系ダンス」)」「フォークダンス」「リズムダンス・現代

的なリズムのダンス(以下, 「リズム系ダンス」)の3つの主内容それぞれについて, 「何を(題材やテーマ, 踊り: 曲名, リズム)」と「どのように(動き, 動き方)」が具体的に例示された。このように改訂された背景には, 授業内で教える内容を明確に示し, 授業のヒントを具体的に提示することで, 中学校第1学年および第2学年のダンス領域の必修化に向けた対応がなされたことを示唆している(朴・村田, 2013)。しかし, 依然として教師側のダンス経験や指導経験, 知識の不足等が指摘されている(中村, 2009; 松本・寺田, 2013)。

特にダンスの技能評価については課題が残されている。表現系ダンス・リズム系ダンスは、「イメージ」や「リズム」をもとにした「自由」なダンスである(村田, 2009)。そのようなことから、フォークダンスが「定形」であるのに対し、表現系ダンス・リズム系ダンスは創意・工夫によって型にはまらない「非定形」に相当する(三浦, 1984)とされている。これらのダンスの技能評価では、得点や記録等の客観的尺度を適用しにくく(寺山, 2004)、どのような動きをしたらよいのか、どのような動きが良い動きなのかは判然としない(寺山, 2005)。そのため、「(技能)評価の仕方」が難しい(宮本, 2005)と報告されている。表現系ダンス・リズム系ダンスそれぞれにおいて、どのような動きにも対応できる「技能の評価観点(以下、技能評価観点)」についての知見は少ない。しかし、長年のダンス経験や指導経験を有するダンスの専門家は、演者(学習者)それぞれが違った動きをしていたとしても、ある程度共通の技能評価観点を持って評価を行っている。このような事実は、学校体育における表現系ダンス・リズム系ダンスの評価についても、ある程度の共通の技能評価観点を持って評価を行える可能性を示唆している。

ダンス授業の技能評価については、「モダンダンスの父」とも称されるルドルフ・フォン・ラバン(Rudolf von Laban, オーストリア, 1879-1958)の動作観察の理論にはじまり、学校体育の分野でも表現運動や創作ダンスを中心にこれまでも数多く検討されてきた(表1)。それらの技能評価に関する研究を受けて、山崎ほか(2014)は、「創作ダンス」の教材「新聞紙を使った表現」の「指導言語」から、指導時に学習者の動きに対し発揮される「動きをみる観点」のうち「動きを強化する観点」として、10観点(①動きの質感, ②大きく動く, ③全身を使う, ④空間の変化, ⑤時間の変化, ⑥力の変化, ⑦動きの連続, ⑧動きの種類, ⑨個性的な動き, ⑩なりきる)を抽出している。これらの観点は、細川ほか(2005)の研究との照査も行っていることから、「新聞紙を使った表現」に限定されない他の創作ダンス教材にも共通する観点である可能性があると述べられている(山崎ほか, 2014)。したがって、それら10観点は非定形であるリズム系ダンスの動きをみる観点にも共通性があると考えられ、表現系ダンスやリズム系ダンスの特性を踏まえた、動きを評価する「技能評価観点」を考える手がかりになると考えられる。

また、上述の10観点は相互に関連していることと考えられ、それぞれの観点の関係性や機能についても、学習指導要領の「技能」の内容と合わせて、技能評価全体を理解しやすいように、構造化して捉えられるような構造

図として整理することが可能であると考えられる。

そこで本研究では、学校体育現場における教員が理解しやすい表現系ダンスやリズム系ダンスで求められる技能評価観点を構造化した図(以下、「技能評価観点構造図」)を提案することを目的として、以下の課題を設定し検討した。

- 1) 山崎ほか(2014)の10観点と学習指導要領の「技能」の内容から「技能評価観点構造図」の試案(以下、「技能評価観点構造図(第1版)」)を作成する。
- 2) ダンスの専門家と小・中・高等学校の体育教員へのインタビュー調査から、「技能評価観点構造図(第1版)」の受容性を検証するとともに、修正案(第2版)を作成する。
- 3) 「技能評価観点構造図(第2版)」の活用可能性と改善点について、ダンス研修会に参加した教員からの意見を手がかりに検討し、「技能評価観点構造図(第3版)」を作成する。

II. 「技能評価観点構造図(第1版)」の作成

1. 「技能評価観点構造図(第1版)」作成の概要

「技能評価観点構造図(案)」は、山崎ほか(2014)の「動きを強化する」10観点(①動きの質感, ②大きく動く, ③全身を使う, ④空間の変化, ⑤時間の変化, ⑥力の変化, ⑦動きの連続, ⑧動きの種類, ⑨個性的な動き, ⑩なりきる)と、学習指導要領における「技能」の内容から、技能評価観点を構造化を図ったものである。構造化は、筆者(体育系大学で舞踊教育・体育科教育研究に8年従事)と大学院生(学部生時代にダンス部に所属・全国大会入賞、体育系大学でダンス実技授業のTAとして3年半従事、高齢者の身体活動、舞踊教育研究に5年従事、博士後期課程3年。)、スポーツ運動学研究者(体育系大学でコーチ学・運動学研究に30年従事)の3名で行った。筆者が表現系ダンス・リズム系ダンスについて「技能評価観点構造図」の素案^{注1)}を作成し、大学院生とスポーツ運動学研究者の2名と共に議論を行い、修正を繰り返した上で整理・集約を行い「技能評価観点構造図(第1版)」を完成させた(図1, 図2)。

2. 「技能評価観点構造図(第1版)」の作成過程

(1) 表現系ダンスにおける「技能評価観点構造図(第1版)」(図1)

表現系ダンスは、学習指導要領(文部科学省, 2008a; 2008b; 2009)において、「いろいろな題材から表したいイメージをとらえ、即興的な表現や簡単なひとまとまりの表現で踊る(小学校第5学年および第6学年)」「多様なテーマから表したいイメージをとらえ、動きに変化を

表1 ダンスの評価に関する主な先行研究

ダンスの種類	技能評価規準	判定基準	ループ リック	観 点	そ の 他	出 典
舞 踊	舞 踊				○ (ラバン身体動作表現理論： 動きの質に関する 動きの構成要素) ①力②時間③空間④流れ	Irmgard Bartenieff & Dori Lewis (1980)
	舞 踊				○ (ラバン理論の具体的説明) 力の質 ①引力 ②動力的性 ③静的力性④外的抵抗 時間の質⑤持続時間⑥速さ ⑦加速・減速 空間の質⑧流線的⑨直線的 流れの質⑩動きが制限された流れ ⑪自由な流れ	Preston- Dunlop, Valerie (1980)
	舞 踊				○ (動力的性の観点から動きを 分析するための評価尺度) ①頭部と胴体②上肢 ③右下肢④左下肢	猪崎、 松浦 (2000)
表現運動	表現運動			○ (学習者の 自己評価の観点) 実践した授業内容に 影響を受ける	○ (評価票の作成) 授業内容(リズムダンス・フォーク ダンス・表現/個人用・グループ用) に即した評価票の作成	西村、 川口 (2007)
	表現運動	○ 第1時リズムダンス：①身体 第2時伸びる-縮む-ねじる： ①動きの変化と連続②身体 第3時ねばねばストーリー： ①動きの変化と連続②身体 第4時ねばねばストーリー： ①動きの変化と連続	○ (判定基準： △-○)			伊藤、 熊谷 (2009)
創作ダンス	創作ダンス			○ (ダンス授業評価の観点) ①おどる・つくる②わかる ③とりくむ④かかわる		松本、 高橋、 長谷川 (1996)
	創作ダンス	○ 身体-①全身②視線 動きの変化と連続- ③動きの大きさ(極限) ④体の変化⑤空間の変化 ⑥時間の変化⑦力の変化 ⑧動きの連続(ひと流れ) ⑨動きのつなぎ イメージ⑩イメージとの関わり	○ (判定基準： マイナス・プラス)			細川、 佐藤、 宮本 (2005)
	創作ダンス				○ (チェックリストの作成) ①体②視線③大きく動く④体の変化 ⑤空間の工夫⑥速さの変化⑦力の変化 ⑧動きの連続⑨動きのつなぎ ⑩イメージにふさわしい動き	宮本 (2005)
	創作ダンス	○ 身体-①全身②視線 動きの変化-③大きさ④変化 ⑤空間⑥速さ⑦リズム ⑧流れ イメージ⑨考え	○ (判定基準： 3：十分満足できる 2：概ね満足できる 1：努力を要する)	○		
創作ダンス・現代的なリズムのダンス・フォークダンス等	創作ダンス 現代的な リズムの ダンス				○ (学習評価からのダンス特性の検討) ①踊る②関わる③創る④楽しさ⑤観る	中村、 浦井 (2007)
	創作ダンス 現代的な リズムの ダンス フォークダンス	○ (事例)	○ (事例)			太田 (2012)
	創作ダンス 現代的な リズムの ダンス フォークダンス	○				国立教育 政策研究所 (2011a、 2011b、 2012)

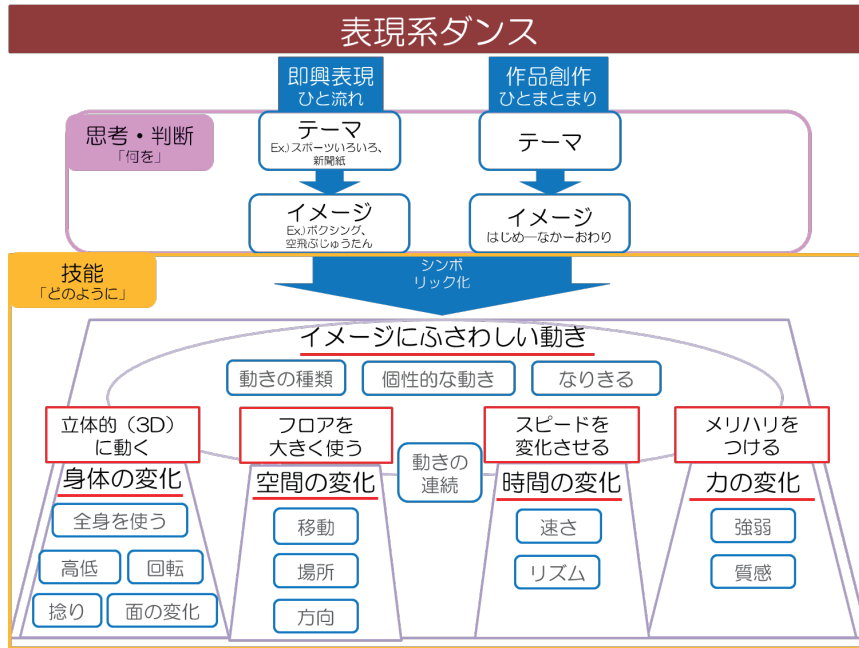


図1 表現系ダンスの「技能評価観点構造図（第1版）」

付けて即興的に表現したり、変化のあるひとままとりの動きにしたりして踊ること（中学校第1学年および第2学年）等のように、技能を「何を」「どのように」表現するかで示されている。一方で、学習指導要領の「思考・判断」の例示においては、「自分の興味や関心に合ったテーマや踊りを設定すること（中学校第1学年および第2学年）」「表したいテーマにふさわしいイメージを見付けること（中学校第3学年および高等学校入学年次）」とも記載されている。そのため、「テーマ」から「イメージ」をとらえる「何を」に関連する過程については、「技能」の観点なのか「思考・判断」の観点なのかについて、筆者と大学院生、スポーツ運動学研究者の3名で議論が繰り返された。その結果、「技能評価観点構造図（第1版）」としては、「何を」にあたる部分は「思考・判断」として表記し、その後の検討課題とした。

「テーマ」と「イメージ」については、表現系ダンスの「即興表現：ひと流れ」「作品創作：ひとまとまり」の2つの大きなねらい別に表記し、「即興表現：ひと流れ」については、例として「テーマ：スポーツいろいろ、新聞紙」、 「イメージ：ボクシング、空飛ぶじゅうたん」の語を追記した。「作品創作：ひとまとまり」についても「イメージ」の箇所に「ひとまとまりの表現」の例として「はじめ-なか-おわり」の語を示した。

それらの「イメージ」を「シンボリック化」し、「どのように」にあたる「動き」の部分へ繋げる構成とした。

「どのように」にあたる部分については、明確な動きの「技能」であるため、山崎ほか（2014）の10観点をもとに、学習指導要領の「技能」の内容と共に、関係性を構

造化する作業を行った。

まず、山崎ほか（2014）の「動きを強化する」10観点のうち「動きの変化」に関連する3観点「空間の変化」「時間の変化」「力の変化」について、「学校体育実技指導資料第9集『表現運動系およびダンス指導の手引き』（以下、「ダンス指導の手引き」）（文部科学省，2013）^{注2)}では、表現系ダンスの「技能のポイント」として、以下のように示されている。

- ・＜空間-軌跡・隊形（群構成）＞空間を大きく使うことができる。空間の使い方（軌跡・隊形）、群の使い方（個と群、2群等）を工夫することができる。
- ・＜時間＞リズムや速さに変化（速く-ゆっくり、急にストップ、スローモーション）を付けることができる。
- ・＜力性＞強弱やアクセントを付けることができる。

また、村田（2011, 2012）が提唱する「4つのくずし」^{注3)}では、「空間の変化」と「空間（場）のくずし」、「時間の変化」と「リズムのくずし」は同様の内容を示していると考えられた。「ダンス指導の手引き」（文部科学省，2013）の「技能のポイント」と「4つのくずし」の動きの例を参考に「空間の変化」の観点には「移動」「場所」「方向」、 「時間の変化」の観点には、「速さ」「リズム」の要素を追記した。また「力の変化」の観点については、要素として「強弱」を追記した。さらに10観点の中の「動きの質感」については、最も関連深いと考えた「力の変化」の要素として表記した。

次に山崎ほか（2014）の10観点のうち、「体」に関連する「大きく動く」、「全身を使う」の2観点については、「ダンス指導の手引き」（文部科学省，2013）では、「技能

のポイント」として、「<空間-体幹>跳んだり、転がったり伏せたりという高低の変化、捻り、面の変化、回転等いろいろな動きをすることができる」と示されている。また、「4つのくずし」（村田，2011；2012）では、「体のくずし」に関連する項目と考えられ、「空間の変化」「時間の変化」「力の変化」に「身体の変化」の観点を追加し、その要素として追記することとした。また「大きく動く」と「全身を使う」は同様の意味を含むため、「全身を使う」に包括した。

4つの「動きの変化」（「身体の変化」「空間の変化」「時間の変化」「力の変化」）は並列表記とし、より理解しやすい表記としてそれぞれ「立体的（3D）に動く」「フロアを大きく使う」「スピードを変化させる」「メリハリをつける」の記載を追加した。

「動きの連続」については、「ダンス指導の手引き」（文部科学省，2013）における「技能のポイント」の「動きをスムーズにつなげて連続させ、気持ちも途切れずに踊ることができる」に該当する。すべての「動きの変化」に関わる項目と考え、4つの「動きの変化」の観点の中心に据え、関連性を強調した。

「なりきる」については、「ダンス指導の手引き」（文部科学省，2013）における「技能のポイント」の「感じを込めてなりきって踊ることができる」に該当する。「動きの種類」、「個性的な動き」については、学習指導要領に示された動きを行った結果として出現するものと考えられ、「なりきる」と合わせて、表現系ダンスのねらいとなる「イメージにふさわしい動き」に直結すると考え、要素として表記した。この「イメージにふさわしい動き」

については、表現系ダンスの最も重要な特性であることから、全てを包括する最上位の観点として位置付けた。

(2) リズム系ダンスにおける「技能評価観点構造図（第1版）」（図2）

リズム系ダンスの技能においては、「何を」にあたる部分は、ロックやサンバやヒップホップ等の「リズム」である。しかし、表現系ダンスと同様「何を」を、技能の一部として明記するののかについては判断することができず、「技能評価観点構造図（第1版）」の段階では「何を」は明記しなかった。ロックやサンバ、ヒップホップ等の「リズム」の特徴をとらえて「リズムに乗る」ことが「どのように」あたると考えられた。よって、「どのように」の最上位には、「リズムに乗る」の観点を位置付けた。以下の観点については、同じく「非定形」である「表現系ダンス」と共通性があることを強調するため、あえて同じ観点を配置した。

Ⅲ. 表現系ダンス・リズム系ダンスの「技能評価観点構造図（第1版）」の受容性検証および修正案（第2版）の作成

ダンスの専門家と小・中・高等学校の体育教員へのインタビュー調査から表現系ダンス・リズム系ダンスの「技能評価観点構造図（第1版）」の受容性を検証するとともに、修正案（第2版）の作成を行った。

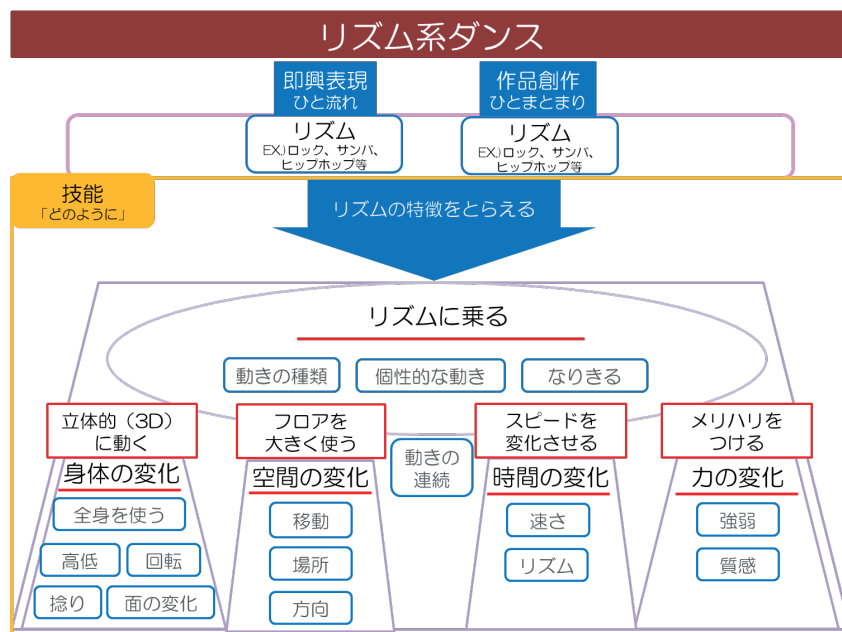


図2 リズム系ダンスの「技能評価観点構造図（第1版）」

表2 インタビュー対象者の属性

	対象者 /性別	所属	職位	ダンス 指導歴	特記事項
ダンスの 専門家	A/女	大学	教授	40年	学習指導要領 作成協力者
	B/女	大学	教授	28年	文部科学省 実技指導資料 作成協力者
	C/女	大学	准教授	20年	
	D/女	大学	講師	6年	博士 (コーチング学)
	E/女	大学	助教	2年	
	F/女	大学	特任 助教	3年	博士 (コーチング学)
体育教員	G/男	大学	講師	5年	元中学校教諭
	H/女	高校	教諭	22年	
	I/女	中学	教諭	24年	
	J/女	小学校	教諭	25年	

1. 方法

(1) 対象者

対象は大学の教員養成課程に勤務する舞踊教育学を専門とする教員(以下、「ダンスの専門家」)6名および小・中・高等学校でダンス単元を担当した経験をもつ教員(以下、「体育教員」)4名であった。対象者の属性は表2に示す通りである。対象者には、研究目的を伝え、インタビュー内容をICレコーダー(OLYMPUS製ボイストレック、V-823)に録音することを説明し、同意を得た。また、得られた結果は本研究の目的のみに使用し、個人情報として外部に漏れないよう配慮すること、インタビューは拒否する権利を保持し拒否によって何らかの不利を被ることがないこと、およびインタビューの途中でも中止できることを文書および口頭で伝えた上で実施した。調査期間は、2016年7月22日から9月22日にかけて行った。

(2) 調査手順

表現系ダンス・リズム系ダンスの「技能評価観点構造図(第1版)」(図1、図2)を、対象者に提示した上で、技能評価観点の構造について、新たな評価観点や用語を含めた修正事項があれば自由に意見を求める形の非構造化インタビュー(メリアム、2004)を行った。

(3) 分析方法

インタビューにおけるすべての会話内容を書き起こし、逐語録を作成した。

逐語録を意味のある1つの文章または単語に区切り、テキスト化し、指摘箇所とそれに関わる指摘事項について、図1・図2で作成した技能評価観点のキーワード毎

に分類した。その後、共通する指摘事項から修正案を作成した。さらに、この分析から得られた意見の数をもとに受容性を検討し、表現系ダンス・リズム系ダンスの「技能評価観点構造図(第1版)」を修正した図(第2版)を作成した。

(4) メンバー・チェック

データの信頼性を高めるため、4名の分析者によりメンバー・チェックを行った。分析者は、前出の筆者と大学院生、スポーツ運動学研究者およびトレーニング科学研究者(体育系大学で運動生理学・バイオメカニクス研究に33年従事)であった。インタビューのテキスト化はすべて筆者が行い、テキストおよびカテゴリーの分類については、筆者と大学院生の2名で議論を行い、内容について完全に一致するよう整理・集約を行った。その後、得られた結果について、先に挙げたスポーツ運動学研究者およびトレーニング科学研究者に客観的な意見を求め、再度検討した。

2. 結果および考察

(1) 表現系ダンスの「技能評価観点構造図(第1版)」に対する意見・修正事項の整理

表3にインタビューデータから得られた、表現系ダンスにおける「技能評価観点構造図(第1版)」の技能評価観点に関わる指摘箇所とそれに関わる指摘事項、修正案について、「評価観点の構成」と「用語」別に示した。指摘を行った対象者にはチェック(○)を付した。

評価観点の構成に関しては、全てのキーワードで指摘があった。特に、「思考・判断『何を』」、「イメージにふさわしい動き」「『身体の変化』『空間の変化』『時間の変化』『力の変化』」は、大幅に第1版を再考する必要があることが指摘され、修正案(第2版)に反映させる示唆が得られた。後段で詳述するが、「思考・判断『何を』」は、「技能評価の一部としての『何を』」へ、「イメージにふさわしい動き」は「動きの質感」と合わせて考えること、新たな観点として「人間関係」や「全身を極に使う」が導出できた。

「用語」は、キーワードに関連した、以下の表現について指摘され、修正案が提案された。「空間の変化」「時間の変化」「はじめ-なか-おわり」「テーマ→イメージ」「即興表現・作品創作」「フロアを大きく使う」。

(2) 表現系ダンスの「技能評価観点構造図(第1版)」の修正案(第2版)の作成

インタビューデータから得られた指摘事項、修正案、また、その他の先行研究の見解も踏まえ、表現系ダンス

表3 表現系ダンスの「技能評価観点構造図（第1版）」に対するインタビュー対象者別指摘箇所と修正案

構造図(第1版)の指摘箇所	指摘事項	ダンスの専門家					体育教員				修正案	修正案作成に向けての検討事項			
		A	B	C	D	E	F	G	H	I			J		
評価観点の構成について	思考・判断「何を」		○	○	○		○						技能評価として扱っては	「何を」の評価観点を付す	
	テーマ→イメージ			○	○								思考・判断の評価に入るのでは		
	イメージにふさわしい動き		○			○		○					「イメージにふさわしい動き」は「質感」と合わせて考えては	「動きの質感」の位置づけの検討	
	力の変化：質感					○							「力の変化」の中にも含まれるのでは 時間・力・空間の変化から出現するものでは		
	動きの連続	「連続」と「質感」があることが大前提 (A)	○											質感・連続が上位にくるのでは	「動きの連続」の位置づけの検討
		時間と力の変化が動きの連続に直結する。ひと流れにするためには時間と力の変化が不可欠 (D)					○							時間・力の変化が直結するのでは	
	身体の変化・空間の変化・時間の変化・力の変化	空間と身体の変化は見えやすく、時間と力の変化は見えにくい。指導が熟練してくると時間・力の変化が見えてくるので一番大事 (A)、最初に意外とこれ(時間・力)っていいですね (B)、方向性があるとすれば力・時間の変化→空間・身体の変化だと思う (C)、時間・力の変化はどの授業でも言える (E)		○	○	○		○						時間・力の変化が上位にくるのでは	身体の変化・空間の変化・時間の変化・力の変化の位置づけの検討
		身体・空間の変化より時間・力の変化だと言え言ほど混乱を招くことから、並列されている方がどの要素も選択できて良い (D)							○					身体・空間・時間・力の変化は並列表記が良いのでは	
	メリハリをつける	空間・時間・力の変化はメリハリをつける要素 (B)、スピードや人間関係など全体を変化させ、面白くさせるのがメリハリ (F)			○									時間・力・空間の変化はメリハリをつける要素では	
		時間と力の変化がメリハリをつける要素 (D)				○								時間・力の変化はメリハリをつける要素では	
	力の変化・時間の変化	力の変化は時間にも関連して重なっている (D)					○							力・時間の変化は共通点があるのでは	
	空間の変化	空間の変化は人との関わりに関連する (B)			○									空間の変化は人との関わりと関連するのでは	
身体の変化・空間の変化	身体と空間の変化はどちらも空間の問題 (A)、身体の変化と空間の変化は広く考えれば「立体的に動く」こと (G)		○						○				身体・空間の変化を合わせて「立体的に動く」となるのでは		
個性的な動き	個性っていうのは全てに一貫している (A)		○										全ての要素に関連するのでは	「個性的な動き」の位置づけの検討	
不足している評価観点	4つのくずしの「人間関係」を入れる (F)												「人間関係」をプラスしては	新観点：「人間関係」の検討	
	「全身を使う」は「変化」をつけるものとは異なる。全身を使うのは基本 (B)、「全身を極に使う」だったらもっと上にくる (C)			○	○								「全身を極に使う」をプラスしては	新観点：「全身を極に使う」の検討	
用語について	空間の変化の要素			○									空間の変化：「隊形」をプラスしては	空間の変化：新要素「隊形」の検討	
	時間の変化の要素			○									時間の変化：「スローモーション」、「止まる」をプラスしては	時間の変化：新要素「スローモーション」「止まる」の検討	
	イメージ：はじめ-なか-おわり			○									「イメージ：はじめ-なか-おわり」ではないのでは	「はじめ-なか-おわり」の位置づけの検討	
	テーマ→イメージ			○									「題材→イメージ」もあるのでは	「テーマ→イメージ」の用語修正	
	即興表現、作品創作			○									作品創作は「創る力=踊る力」では	「即興表現・作品創作」の追記	
	フロアを大きく使う								○				「フロアを使う」、「個」「群」をプラスしては	「フロアを大きく使う」の用語修正	
	質感									○			「質感」の意味がわかりにくいのでは	「質感」用語の追記	

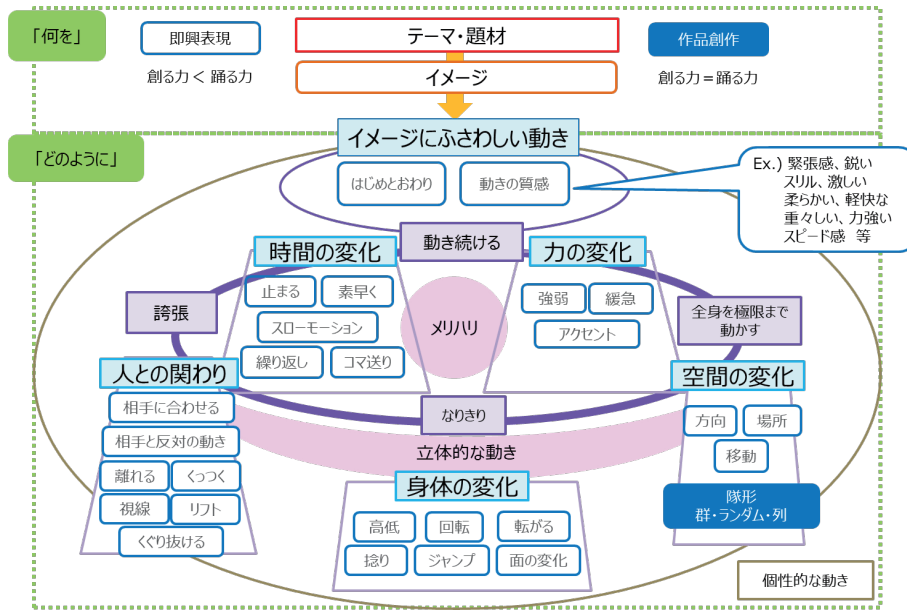


図3 表現系ダンスの「技能評価観点構造図（第2版）」

の「技能評価観点構造図（第1版）」の修正案（第2版）を図3に示す。

「何を」の評価観点は、「技能」か「思考・判断」の評価観点とするかについて、双方の意見が得られた。表現系ダンスの「技能」の核の部分となる評価観点は、「イメージにふさわしい動き」であることから、「イメージ」にあたる「何を」の部分が必要であると判断し、「技能」の評価観点の上部に表記するのが妥当であると考えた。また、「用語」についての指摘にもあったように、授業展開によって、大きな「テーマ」を与えてそこから動きの「イメージ」を表出していく場合と、動きやものといった「題材」から動きの「イメージ」を表出していく場合もあることから、「何を」の部分については、先行研究（村田，2011）を参考に、「テーマ・題材」→「イメージ」という表記で統一した。

「動きの質感」については、力性のみならず、空間性、時間性を含めた動き全体に関連し、題材やイメージと密接に関係するとの指摘から、全体を包括する「イメージにふさわしい動き」の観点の要素として配置するのが妥当であると考えた。また、「質感」の意味がわかりにくいという指摘（対象者記号J）から、「動きの質感」の例を補足として追加した。さらに、「イメージにふさわしい動き」の観点到「はじめとおわり」を配置した。「はじめとおわり」については構成の仕方であるという指摘から、「イメージ」の例としてではなく、「イメージにふさわしい動き」の観点到属する要素として示した。

次に「イメージにふさわしい動き」全体に関与する要素として、「動き続ける」「なりきり」「全身を極限まで動かす」「誇張」の4観点を配置した。「動き続ける」につ

いては、「動きの連続」をより理解しやすい表現としたものである。「真ん中に『連続』が来るのかも。2つにしろって言われたら『連続』と『質感』ですよ(A)」等の発言から、表現系ダンスの構成要素として重要項目であることが伺えた。同様に「全身を使うっていうのは基本的なもので(B)」「『全身を極限まで使う』だったら、もっとこっち(上)に来て(C)」等の発言から、「全身を極限まで使う」^{註4)}という項目も動きの基本要素であると考え、「身体の変化」とは別項目として示した。また、初見でも理解しやすいよう用語を「全身を極限まで動かす」とした。「誇張」については、表現系ダンスにおける技能のポイントとして重要な要素であることから（文部科学省，2013）追記した。

「身体の変化」「空間の変化」「時間の変化」「力の変化」の位置づけについては、「見えやすいものを細かくするのは後からでいいことで、熟練してきて、右側（時間・力の変化）が一番大事なわけです(A)」「私はこっち（力・時間の変化→空間・身体の変化）だと思う。方向性があるとしたら(C)」という発言からも、ダンスの構成要素として、「時間の変化」「力の変化」が変化に関する項目の中では上位の位置と考えられた。また、この「時間の変化」「力の変化」の関係性については、重なりを指摘する発言も多く、「メリハリ」という言葉との関連性も指摘されたため、「メリハリ」というカテゴリーの中に、「時間の変化」「力の変化」を配置し、相互関係を意識できるように構成した。「時間の変化」のカテゴリーには、「こっち（表現系ダンス）にも『止まる』が入りますね。『スローモーション』『ストップモーション』っていうのは、つまり、ずっと動き続けているわけではなくて、『止

まる』っていう時間の変化がありますもんね (B)」という発言より「止まる」「素早く」「スローモーション」「繰り返し」を配置し、今回のインタビュー項目にはなかったが、表現系ダンスでよく使われる要素である「コマ送り」(村田, 2011)も追加で配置した。「力の変化」については、「緩急」「強弱」「アクセント」を配置した。さらに「ここ(時間・力の変化)が一番動きの連続に直結するはずなんですよ (D)」との発言から、「動き続ける」を「時間の変化」と「力の変化」に近い位置に配置した。

一方で、変化に関する項目について、「並列されてる方が、あっこれでも、これでもいいんだっていう気持ちにはなれると思うんですけど (D)」という発言から、矢印は示さず、「身体の変化」「空間の変化」についても、必要要素として視覚的に捉えられるよう工夫した。

「身体の変化」「空間の変化」は、どちらも「立体的に動く」ための要素であるとの発言から「立体的に動く」というカテゴリに属すよう配置した。また、「4つのくずし」(村田, 2011; 2012)の「人間関係のくずし」に該当する「人との関わり」の項目を追加し、同じく「立体的に動く」のカテゴリに配置した。「身体の変化」は、「高低」「回転」「転がる」「捻り」「ジャンプ」「面の変化」を配置した。「空間の変化」は、「移動」「場所」「方向」に加えて、「『集まる-離れる』が一番基本なんだろうけど、『隊形』ですよ (B)」「『個』とか『群』とかいう言葉があるかも (H)」等の発言から、「隊形：群・ランダム・列」を追加して配置した。「フロアを(大き

く)使う」という用語については、「逆にフロアを限定するっていうのも『空間の変化』なので (A)」という発言や、「4つのくずし」(村田, 2011; 2012)ですでに使われている「空間の変化」という用語の方が一般化されているため、新たに作成した図からは削除した。「人との関わり」については、先行研究(村田, 2011)を参考に「相手と合わせる」「離れる」「くっつく」「相手と合わせる」「相手と反対の動き」「視線」「リフト」「くぐり抜ける」の項目を追加した。

「個性的な動き」については、「この個性っていうのは、もっと全部を一貫してるかもしれないですよ (A)」という発言から、様々な要素をもとにした「イメージにふさわしい動き」そのものが「個性的な動き」となっていると捉え、枠外に配置した。

また、「創作の場合は、自分が創った動きだから「創る力」イコール(踊る力)なんですよ。それを明確に踊ってるかっていうと、ほとんど創る力なんですかね。創らなきゃ動きがないわけだから (B)」という発言から、「即興表現」については、「創る力<踊る力」、作品創作については「創る力=踊る力」の表記を追加した。

(3) リズム系ダンスの「技能評価観点構造図(第1版)」に対する意見・修正事項の整理

表4にインタビューデータから得られた、リズム系ダンスにおける「技能評価観点構造図(第1版)」の技能評価観点に関わる指摘箇所とそれに関わる指摘事項、修正

表4 リズム系ダンスの「技能評価観点構造図(第1版)」に対するインタビュー対象者別指摘箇所と修正案

	構造図(第1版)の指摘箇所	指摘事項	ダンスの専門家						体育教員				修正案	修正案作成に向けての検討事項	
			A	B	C	D	E	F	G	H	I	J			
評価観点の構成について	リズムに乗る	リズムの乗り方はロックとサンバとヒップホップのリズムで異なる。リズムの特徴にあった乗り方が3つある (A)	○											ロック、サンバ、ヒップホップ別にリズムの乗り方を示しては	リズムの種類別の評価観点の検討
	質感	リズム系ダンスにおける質感は、「動きを捉える」ことになる (F)												質感は「リズムの特徴を捉えた動き」では	「動きの質感」の位置づけの検討
	不足している観点	リズム系ダンスにおいての「何を」は「リズムに乗る」(A)、リズム系ダンスは「何を」が「リズム」で技能のひとつ (F) 「極に動く」「メリハリをつける」ことはすべてのダンスに共通で、良い動きとされるものはすべてそれがある (C)	○					○						「何を」は「リズム」にあたるのでは 「極に動く」をプラスしては	新観点：「何を」の検討 新観点：「極に動く」の検討
用語について	時間の変化	「時間の変化」ではなく、「リズムに乗る、崩す」が妥当。リズムに乗るというのは、合わせるだけでなく、倍テンポやフリーズや止まるも入るので (B)		○										時間の変化：「リズムに乗る・崩す」、「合わせる」、「止まる」、「倍でとる」、「フリーズ」をプラスしては	時間の変化：新要素「リズムに乗る・崩す」、「合わせる」、「止まる」、「倍でとる」、「フリーズ」の検討
	即興表現	リズム系ダンスでは「即興表現」とは言わない (A)、「自由に表現」という用語が妥当 (B)	○	○										「即興表現」ではなく「自由に表現」では	「即興表現」の用語の検討
	作品創作	リズム系ダンスの「作品創作」は、「オリジナルダンス創り」という用語が妥当 (B)		○										「作品創作」ではなく「オリジナルダンス創り」では	「作品創作」の用語の検討
	リズムに乗る	「リズムに乗る」だとはっきりしないので「リズムの特徴をとらえる」にする (F)												「リズムに乗る」ではなく「リズムの特徴をとらえる」では	「リズムに乗る」の用語の検討

案について「評価観点の構成」と「用語」別に示した。指摘を行った対象者にはチェック（○）を付した。

評価観点の構成に関して、「リズムに乗る」「質感」「不足している観点」について指摘があった。後段で詳述するが、リズム系ダンスにおける「何を」にあたる「リズム」に関しては、リズムの種類別の評価観点が必要となり、修正案（第2版）に反映させる示唆が得られた。

「用語」は、キーワードに関連した、以下の表現について指摘され、修正案が提案された。「時間の変化」「即興表現」「作品創作」「リズムに乗る」。

(4) リズム系ダンスの「技能評価観点構造図（第1版）」の修正案（第2版）の作成

インタビューデータから得られた指摘事項、修正案、また、その他の先行研究の見解も踏まえ、リズム系ダンスの「技能評価観点構造図（第1版）」の修正案（第2版）を図4に示す。

不足している観点として指摘があった通り、リズム系ダンスも「非定形」のダンスであるため（1984、三浦）、表現系ダンスと同様に「何を」「どのように」の形で表記することとした。「何を」については、小学校から高等学校まで学習指導要領に示されている「ロック」「サンバ」「ヒップホップ」のそれぞれのリズムを明示した。その上で、「ロック」「サンバ」「ヒップホップ」のリズムの特徴をとらえた動き、すなわち、ロックは「弾み」、サンバは「スイング」、ヒップホップは「ダウンとアップの縦のり」という身体の使い方について、「リズムの特徴をとらえた動き」の категорияに配置した。「弾み」「スイン

グ」「ダウンとアップの縦のり」の身体の使い方については、動きについて理解しやすいよう補足を加えた。「リズム系ダンスにおける質感は『動きを捉えること』(F)」との指摘から、「動きの質感」は、「リズムの特徴をとらえた動き」に内包されるものとし、用語としては新たに作成した図からは削除した。

次にそれぞれの「リズムの特徴をとらえた動き」を変化させる「リズムに乗る・リズムを崩す」を下部に配置した。「リズムに乗る・リズムを崩す」は表現系ダンスの「時間の変化」にあたるが、「ここは『速さ』とか『リズム』じゃなくて、『リズムに乗る、崩す』。つまりリズムに乗るってというのはリズムに合わせてるだけじゃなくて、リズムに乗らないで倍テンポをとったり、グチャグチャグチャって、あとフリーズしたり、でまたリズムに合うってことで乗るってことなので、ただの『時間の変化』とは違いますね (B)」「リズムっていうスピードを変化させるんだけど、それをリズムに乗りながら、スピードを変化っていうとわかりづらいというか、『リズムに合わせる』『崩す』とか『止まる』(B)」というような指摘から、「リズムに乗る・リズムを崩す」という用語で表現した。「リズムに乗る・リズムを崩す」の категорияには、「リズムに合わせる」「リズムに合わせない」「シンコペーション」「ストップ・フリーズ」「素早く」「倍速」を配置した。また、「リズムに乗る・リズムを崩す」際に動きを深めるためには、「メリハリ」が重要な要素であるため、関連が指摘された「力の変化」との中間に配置した。「力の変化」については、「強弱」「緩急」「アクセント」を配置した。

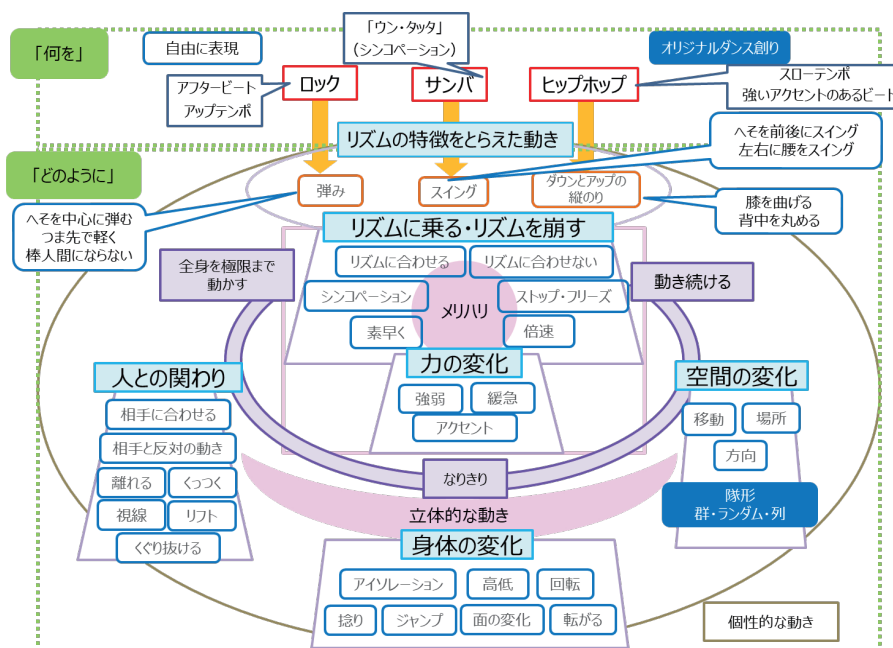


図4 リズム系ダンスの「技能評価観点構造図（第2版）」

「身体の変化」「空間の変化」「人との関わり」については、表現系ダンスとの共通であることから、「立体的に動く」というカテゴリーに属すよう配置した。「身体の変化」については、表現系ダンスと共通の「高低」「回転」「転がる」「捻り」「ジャンプ」「面の変化」に加え、身体各部位の動きを意識する「アイソレーション」を追加で配置した。

「動き続ける」「全身を極限まで動かす」「なりきり」についても表現系ダンスと同様に、すべての観点に関わるものであることから、円上に配置した。「誇張」については、リズムの特徴をとらえて踊ることが主目的であるリズム系ダンスでは評価されない項目のため削除した。「個性的な動き」な動きも表現系ダンスと同様に枠外に配置した。

「即興表現」「作品創作」という用語は、表現系ダンスで使用されるものであるとの指摘から、リズム系ダンスでは、「自由に表現」「オリジナルダンス創り」とした。

IV. 現職の体育教員を対象とした表現系ダンス・リズム系ダンスの「技能評価観点構造図（第2版）」の活用可能性と改善案を手がかりとした「技能評価観点構造図（第3版）」の作成

表現系ダンス・リズム系ダンスの「技能評価観点構造図（第2版）」の活用可能性に関する基礎的資料を得るため、以下の手順で調査を行った。

1. 方法

(1) 対象者

対象は、2017年度のダンス研修会（大分県、長崎県、

熊本県）に参加した現職の体育教員71名であった。対象者の属性は表5に示す通りである。対象者には、研究目的を伝え、得られた結果は本研究の目的のみに使用し、個人情報として外部に漏れないよう配慮すること、調査は拒否する権利を保持し、拒否によって何らかの不利益を被ることがないこと、および調査の途中で中止できることを文書および口頭で伝えた上で実施した。調査期間は、2017年6月30日から9月3日にかけて行った。

(2) 調査手順および分析方法

教員対象のダンス研修会の中で、表現系ダンス・リズム系ダンスの「技能評価観点構造図（第2版）」（図3、図4）を対象者に提示し、技能評価観点の構造について説明を行った。研修会終了後に、「技能評価観点構造図（第2版）」の活用可能性について以下の項目について質問紙調査を実施した。

- Q1. 「技能評価やダンス指導においてアドバイスをする上で役立ちそうか」
- Q2. 「上記（Q1）を選択した理由について書いてください」
- Q3. 「図について改善点（ここがわかりにくい、もっとこうの方がわかりやすい等）があれば書いてください」

Q1については、「5. とてもそう思う、4. 少しそう思う、3. どちらともいえない、2. あまりそう思わない、1. そう思わない」の5件法を用いて行い、平均値および標準偏差を求めた。Q2およびQ3については、自由記述とし、表5にまとめた。

(3) 統計処理の方法

自由記述の内容については、内容を精査した上で、類似の内容と判断したものについて同一の回答として集計した。集計した内容については、IIのインタビュー調査と同様に4名の分析者によりメンバー・チェックングを行った。自由記述内容のテキスト化はすべて筆者が行い、テキストおよび分類については、筆者と大学院生の2名で議論を行い、内容について完全に一致するよう整理・集約を行った。その後、得られた結果について、先に挙げたスポーツ運動学研究者およびトレーニング科学研究者に客観的な意見を求め、再度検討した。

2. 結果および考察

(1) 活用可能性の検討

Q1の「技能評価やダンス指導においてアドバイスをする上で役立ちそうか」に関しては、5段階評価で、 4.9 ± 0.3 ポイントで、93.0%の教員が「5. そう思う」

表5 ダンス研修会参加者の属性

県名	校種	人数 (名)
大分県	小学校	7
	中学校	18
	特別支援	2
	未記入	4
長崎県	小学校	5
	中学校	3
	高等学校	8
	特別支援	5
	未記入	1
熊本県	小学校	1
	中学校	2
	高等学校	3
	特別支援	11
	その他	1
合計		71

表6 「技能評価観点構造図(第2版)」が技能評価およびダンス指導で役立つと思った理由と改善点

	内容	主な記述例	コメント数
技能評価やダンス指導で役立つと思った理由	技能評価	・技能評価観点が整理されている	7
		・具体的な技能の評価観点が理解できる	8
		・動きや視点が観点別に示されていてわかりやすい	4
		・ダンス技能の全体像、構造が見てわかる	2
		・評価の規準やポイントがわかる	8
		・評価についての説明がしやすくなる	1
	ダンス指導	・どこを工夫すればもっと良くなるのか改善のポイントを指導しやすい	4
		・生徒への具体的な言葉かけの参考になる	4
		・目指すべきもの、重点目標、ねらいがわかりやすい	2
		・具体的な動きがあるので示範しやすい	1
		・系統的な指導を行うことができる	1
		・指導と評価の一体化につながる	4
	その他	・生徒に見える形で示しやすい	1
		・子どもに伝わる専門用語でないので利用しやすい	1
		・オリエンテーションや授業展開の中での様々な活用方法の可能性	3
・教員間での指導・評価の共有に役立つ		4	
・指導者のみならず生徒もねらいや評価について理解しやすい		3	
改善点	評価観点の内容	・身体の変化に「顔の表情」が入るのでは	1
		・「身体の変化」はもう少し動きの種類があるように思う	1
		・「動きの質感」がよくわからない	1
	デザイン・構成	・字の大きさ・太さに違いがあると見やすい	1
		・どこがより重要なのかということがあれば、そこを強調してほしい	2
		・言葉が多いのもっとシンプルにしてほしい	1
	追加・発展	・学年別の相対表も欲しい。各学年でどの程度必要か等	1
		・教師で現場の子どもの実態に合わせて言葉を変える必要がある	1
		・この図をもとにした事例案を作ってほしい	1

7.0%の教員が「4. 少しそう思う」の高評価であった。また、その理由について表6に示した。これまでダンスの技能評価の観点を整理したものがなかったことから、技能評価観点を具体的に1枚の紙で構造を示したことに對して肯定的にとらえられていることがわかった。さらにダンス指導においても、動きのねらいが明確となり、動きを良くするための言葉かけや示範にも活用できる可能性も示唆された。また「生徒側からもねらいや評価について理解しやすい」といった意見や「教員間の認識の共有」等にも役立つ可能性も示された。

(2) 改善点の検討

一方、改善点については、「評価観点の内容」「デザイン・構成」「追加・発展」の3つの意見が得られた。

「評価観点の内容」に関する「顔の表情」については、表現系ダンス・リズム系ダンスの「なりきり」に内包できる項目であると考えられる。また「『身体の変化』はもう少し動きの種類がある」との指摘のように、今後も「これはどの観点到に含まれるのか」「これは技能評価観点ではないのか」等の疑問点が噴出する可能性は高い。表

現系ダンスやリズム系ダンスは非定形で、イメージやリズムによって、様々な動きが出現するため、すべての動きについて対応できる技能評価観点を作成することは限界があると考えられる。今回作成した「技能評価観点構造図(第2版)」(図3、図4)は、試案である「技能評価観点構造図(第1版)」(図1、図2)と比較して、より詳細になったことで、用語が増え、技能評価観点の関係性も複雑化し、ひと目でわかる簡潔明瞭な図であるとは言い難い。また「動きの質感」等、ダンスの世界では日常的に使われているが、一般的でない用語等も多い。今後も多くの意見を集約し、技能評価観定の選定や、一般的でない用語・表現の修正や補足の有無等検討する必要がある。

「デザイン・構成」に関する「字の大きさや太さ」「重要事項の強調」「シンプル化」については、先述した通り、複雑化された「技能評価観点構造図(第2版)」の今後の改良の方向性のポイントであり、学校現場での活用に向け、極めて重要な指摘である。また「技能評価観点構造図(第2版)」はカラーで作成し、類似する技能評価観点を同系色で示す等工夫を施したが、実際の学校現場

での活用を考えると、コスト面からもモノクロ印刷でも明確に関係性がわかるようにデザインする必要がある。ダンスを専門としない教員や教員志望の学生等がより理解しやすく、活用しやすいツールとするためにも、ダンスの専門家、現職の体育教員等様々な立場からの意見を集約し、修正を図りながらさらに検討を重ねる必要がある。

「追加・発展」の項目においては、「学年別の相対表」に関する要望があった。校種や学年別に学習指導要領が系統性を持って示されていることから、各段階でどの技能をどの程度評価する必要があるのかについて疑問が出現することは必然である。しかしながら、学習指導要領における表現系ダンス・リズム系ダンスの技能は、他の多くの運動領域とは異なり、具体的な技や技能の構造があらかじめ存在し、易しいものから難しいものへとその内容が段階的に示されてはいる。最終的な技や技能の習得を目指すのではなく、それぞれのダンスの特性と関連づけられた技能が重視されている。「ダンス指導の手引き」(文部科学省, 2013)には、「ダンス系」領域の技能は、子ども一人一人の多様な表現を認め、引き出すことによって、広がる多様なものであり、技能は一律のものではなく、多様で複線的に高まりが見られると述べられている。村田(2008)は、「ダンス系」領域について、外にある内容を身に付けていく「習得型」学習ではなく、ゴールフリー的な「探求型」学習を基本とすることに特徴があることを指摘している。本研究の研究課題2におけるインタビューの中でも「ダンスの発展はまずスパイラルで、この全体性(技能評価観点すべて)を持っていない限りは(成り立たない)。(中略)こういう(発育段階によって学習する技能評価観点を選択する)のではないってことです(A)」という発言が認められた。それゆえ、技能評価観点の重要度を学年別に示すことには慎重にならざるを得ない。

今回作成した「技能評価観点構造図(第2版)」は、あくまで表現系ダンス・リズム系ダンスの技能評価観点とその関係性を示したものであり、示された技能評価観点すべてを指導・評価しなければならないものでは決していない。ゴールフリー型の領域特性を生かし、児童・生徒から出現した様々な動きを、共通性をもった観点で評価し、より良い動きへ導くための参考とするためのものである。それぞれの校種・学年に対応した学習指導要領に基づき、ダンスを指導する教員が、授業において何をねらいとし、何を指導するかによって、技能の「評価規準」^{注5)}が設定されるが、教員がその技能の「評価規準」に関連する技能評価観点を構造的に知ることによって、より指導や評価がスムーズになると考える。したがって、ダン

ス授業の技能の指導や評価を行う際の一助となり、より効果的な活用を促すためにも、図の見方・読み取り方について、誤解のないよう正しく教員に示すための工夫が必要であると考えられる。

また、「現場の子どもの実際に合わせて言葉を変える必要がある」との指摘があった。今回は、ダンスを指導する教員の技能評価に関する理解を促す目的で作成したものであり、特に低年齢の児童への指導の際には、子どもの発育発達段階を考慮して、理解しやすい言葉に変える等の対応をする必要があると考える。

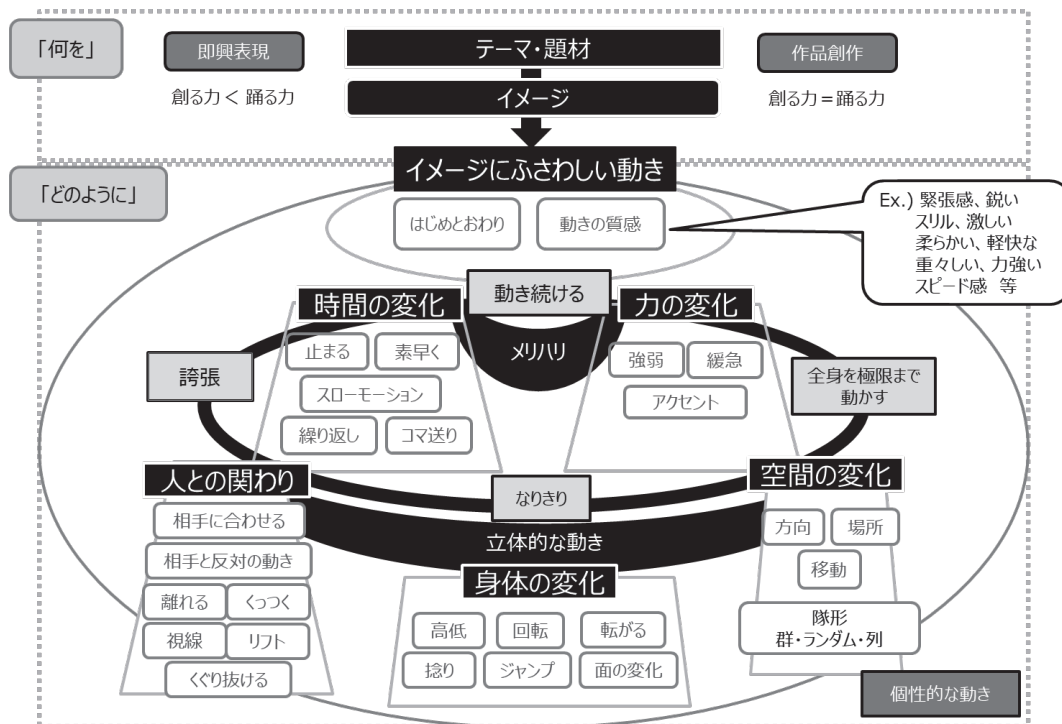
一方、小学校・中学校は平成29年に、高等学校は平成30年に新学習指導要領が示された(文部科学省, 2017a; 2017b; 2018)。新学習指導要領では、すべての教科等の目標および内容を「知識及び技能」「思考力, 判断力, 表現力等」「学びに向かう力, 人間性等」の3つの柱で整理された。また、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、授業改善を推進することも示されている。特に「知識」と「技能」が一体となったことで、ダンスにおいても「知識」と「技能」を関連付けて学習させることが重要である。例えば、「技能」のリズム系ダンスの「リズムの特徴をとらえた動き」、表現系ダンスの「イメージにふさわしい動き」を実現するためには、どのようにすれば良いのかという「表現の仕方」についての「知識」が必要となる。これまで教員のみが持ち合わせていた「知識」について、児童や生徒にも提示し、「わかる」と「できる」を関連付けることが、「主体的・対話的で深い学び」の実現に寄与する可能性も考えられる。したがって、これからは、教員自身の技能評価観点に関する「知識」を、児童や生徒に、指導内容に応じて、的確に示さなくてはならない場面が多くなることが予想され、新たに、校種や学年を考慮した、児童や生徒への提示を目的とした「技能評価観点構造図」の教材作成も今後の課題となる。

さらに要望としてあげられた「事例案」の作成についても、現場の教員が感じている課題や求められているものを追求し、今後検討を重ねる必要がある。

3. 「技能評価観点構造図(第3版)」の提案

前述の「技能評価観点構造図(第2版)」に対する改善点に関する記述の検討から、複雑化された「技能評価観点構造図(第2版)」に関する見やすさへの対応と、図の理解を促す提示方法の工夫が喫緊の課題であることが明らかとなった。

そこで、これらの課題の解決する第一段階として、教員からの意見を反映させた「技能評価観点構造図(第3版)」を作成することとした。作成は、筆者と大学院生、スポーツ運動学研究者の3名で議論を行い、修正を繰り返



【表現系ダンスの技能評価観点構造図の解説】

表現系ダンスの核となる技能評価の観点は、「イメージにふさわしい動き」と考えた。従って、「イメージ」の出発点となる「テーマや題材」についても技能評価観点構造図でも必要と考え、技能評価観点の上部の「何を」に位置づけ、評価観点到に含めた。なお、直接的な評価観点ではないが、ダンスを実施する条件として「即興表現」「作品創作」という観点もあることから、補足的に配置した。

「イメージにふさわしい動き」が「どのように」実施されているかを評価する観点としては、まずは表現系ダンスの基本的な動きである「動き続ける」「なりきり」「全身を極限まで動かす」「誇張」の4観点を手がかりに評価することとした。また、それらの動きを「時間の変化」「力の変化」「身体の変化」「空間の変化」「人との関わり」という観点を加えることで、より詳細に評価できると考えた。さらに、5つの各観点の詳細な観点も示した。なお、前述の5つの観点は授業のねらいや内容によって取捨選択されるものである。一方、「時間の変化」「力の変化」は「メリハリ」という観点にまとめて評価されたと考えた。「身体の変化」「空間の変化」「人との関わり」は、「立体的に動く」という観点にまとめて評価できると考えた。

なお、「個性的な動き」という観点は、「イメージにふさわしい動き」が実現されているときに現れるものとして捉え、補足的に配置した。

図5 表現系ダンスの「技能評価観点構造図(第3版)」

返した上で整理・集約を行い「技能評価観点構造図(第3版)」を完成させた(図5, 図6)。「技能評価観点構造図(第3版)」の作成では、以下の点に配慮した。

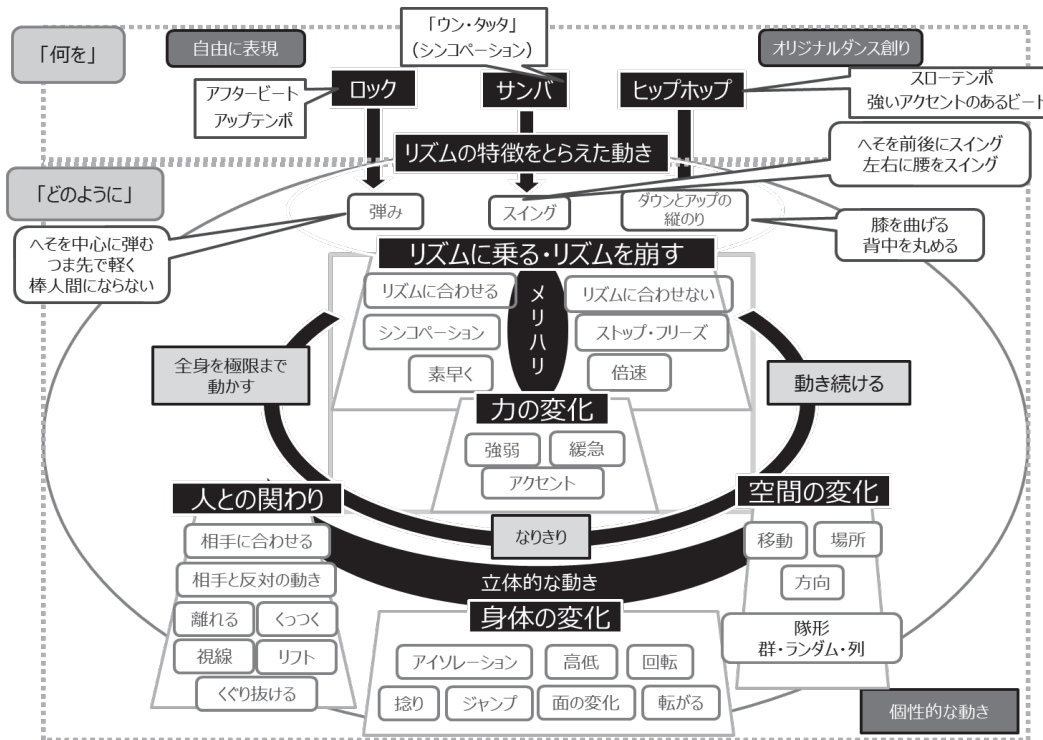
- ① 主となる技能評価観点は、黒の白抜き表示と色付きの四角^{註6)}で記載し、視覚的に強調して見え、さらにモノクロ印刷にも対応できるように工夫した。
- ② また、「技能評価観点構造図(第3版)」の下に簡単な解説文を付した。「技能評価観点構造図(第3版)」の見方を図と共に示すことで、複雑に見える図のどこをどのように見れば良いかについて理解が促されるのではないかと考えた。

今後は、前述の未解決の改善点も含め、様々な立場か

らの意見を集約し、より活用しやすい「技能評価観点構造図」の作成を進めていく必要がある。

V. 要約

本研究は、学校体育現場における教員が理解しやすい表現系ダンスやリズム系ダンスで求められる技能評価観点を構造化した図(「技能評価観点構造図」)を提案することを目的とした。そのために、まずダンスの専門家6名と小・中・高等学校の体育教員4名へのインタビュー調査を行った。そこでは「技能評価観点構造図(第1版)」の受容性の検証と技能評価観点等の修正箇所の明確化を行い、調査対象に概ね受容される「技能評価観点



【リズム系ダンスの技能評価観点構造図の解説】

リズム系ダンスの核となる技能評価の観点は、「リズムの特徴をとらえた動き」と考えた。しかし、どんな「リズム」を評価するかということも技能評価観点構造図でも必要と考え、学習指導要領に校種・学年別に取り扱う例示として示されているロック、サンバ、ヒップホップを技能評価観点の上部の「何を」に位置づけ、評価観点に含めた。なお、直接的な評価観点ではないが、ダンスを実施する条件として「自由に表現」「オリジナルダンス創り」という観点もあることから、補足的に配置した。

「リズムの特徴をとらえた動き」が「どのように」実施されているかを評価する観点としては、まずはリズム系ダンスの基本的な動きである「動き続ける」「なりきり」「全身を極限まで動かす」の3観点を手がかりに評価することとした。また、それらの動きを「リズムに乗る・リズムを崩す」「力の变化」「身体的变化」「空間的变化」「人との関わり」という観点を加えることで、より詳細に評価できると考えた。さらに、5つの各観点の詳細な観点も示した。なお、前述の5つの観点は授業のねらいや内容によって取捨選択されるものである。一方、「リズムに乗る・リズムを崩す」「力の变化」は「メリハリ」という観点到まで評価されることがある。「身体的变化」「空間的变化」「人との関わり」は、「立体的に動く」という観点到まで評価できると考えた。

なお、「個性的な動き」という観点は、「リズムの特徴をとらえた動き」が実現されているときに現れるものとして捉え、補足的に配置した。

図6 リズム系ダンスの「技能評価観点構造図 (第3版)」

構造図 (第1版)の修正案 (第2版)を作成した。次に、ダンス研修会に参加した教員71名を対象に「技能評価観点構造図 (第2版)」の活用可能性および改善点について調査した。「技能評価観点構造図 (第2版)」は約9割以上の教員から活用可能性が確認されたが、モノクロ印刷でも理解しやすく、視覚的にとらえやすいシンプルなデザインに改善すること等、現場の教員がより活用しやすいように改良の必要性が示唆された。そこで、教員からの意見を一部反映させ、解説文を付した「技能評価観点図 (第3版)」を作成した。

今後は、未解決の改善点を含めて、「技能評価観点図」をより学校現場で活用しやすいように修正を図りながら

さらに検討を重ねる必要がある。

注

注1) 本研究では、「素案」は「試案」の前段階のものとして扱う。

「素案」:ごく大まかな案 (三省堂, 大辞林 第三版)
 「試案」:検討の材料として、試みに提出する案。試みに作った計画や意見 (三省堂, 大辞林 第三版)

注2)「学校体育実技指導資料第9集『表現運動系およびダンス指導の手引』」は、文部科学省から学習指導要領の解説に示された内容の一層の理解を図り、具体的な授業づくりに繋がることを目的に2013年に刊行された

(朴ほか, 2015)

注3) 「くずし」は「変化」を意味し、即興表現等自由なダンスを踊る際のヒントとして、表現系ダンス・リズム系ダンス共通の「4つのくずし」を村田 (2011, 2012) が提唱している。「4つのくずし」は「空間(場)のくずし」「体のくずし」「リズムのくずし」「人間関係のくずし」から成り立つ。「空間(場)のくずし」は「方向や場の使い方の変化」を、「体のくずし」は「ねじったり、回ったり、跳んだり、体の状態を様々に変えること」, 「リズムのくずし」は「素早く、ゆっくり、急に止めて等のリズムや速さの変化」, 「人間関係のくずし」は「離れたり、くっついたり、反対にしたり、くぐり抜けたり、まねし合ったり、かけ合ったり、リフトをしたり等1人ではできない動き」を意味する。

注4) 対象者記号Cがインタビュー内で答えた「全身を極に使う」とは、「極まで伸びる、極まで小さくなる(C)」という発言からも、全身をただ「大きく」使うだけではなく、「小さく」なる際にも極限まで「小さく」するという意味を込めての発言であると考えられる。

注5) 「評価規準」とは、目標に準拠した評価を着実に実施するため、各教科・科目の目標だけでなく、領域や内容項目レベルの学習指導のねらいが明確になっていること、学習指導のねらいが生徒の学習状況として実現されたとはどのような状態になっているかを具体的に示したもので、各学校において設定するものである(国立教育政策研究所, 2012)。例えば、中学校第3学年および高等学校入学年次の創作ダンスの「技能」の例示において、「身近な生活や日常動作：『出会いと別れ』ではすれ違ったりくっついたり離れたり等の動きを、緩急強弱を付けて繰り返して表現すること」との項目がある。その項目を授業で行った際の技能の「評価規準」は、「テーマに応じた動きを、緩急強弱を付けたり、繰り返したりして表現することができる」と設定することができる(太田, 2012)。例示の「対極の動きの連続：『ねじる－回る－見る』では、ゆっくりギリギリまでねじって力を検討ためておき、素早く振りほどくように回って止まり、視線を決める等変化や連続のあるひと流れの動きで表現すること」を授業で行った場合は、技能の「評価規準」は「変化や連続のあるひと流れの動きで表現することができる」と設定することができる(太田, 2012)。同じ学年の内容でも、扱うテーマによって技能の「評価規準」は異なる。

注6) ・表現系ダンス

黒の白抜き表示の技能評価観点：「テーマ・題材」「イメージ」「イメージにふさわしい動き」「メリハリ」「時間の変化」「力の変化」「立体的な動き」「身体の変化」

「空間の変化」「人との関わり」

色付きの四角：「動き続ける」「全身を極限まで動かす」「誇張」「なりきり」

・リズム系ダンス

黒の白抜き表示の技能評価観点：「ロック」「サンバ」「ヒップホップ」「リズムの特徴をとらえた動き」「メリハリ」「リズムに乗る・崩す」「力の変化」「立体的な動き」「身体の変化」「空間の変化」「人との関わり」

色付きの四角：「動き続ける」「全身を極限まで動かす」「なりきり」

文 献

- 細川江利子・佐藤みどり・宮本乙女 (2005) 創作ダンス授業における学習者の技能評価－技能評価規準作成の試み－. 舞踊教育学研究, 7: 3-17.
- Irmgard Bartenieff and Dori Lewis (1980) Body movement coping with the environment. Gordon and Breach Publisher.
- 伊藤恵子・熊谷佳代 (2009) 小学校における表現運動の実践的研究－技能に関する評価表の作成と規準作成のための指導事例について－. 舞踊教育学研究, 11: 11-22.
- 猪崎弥生・松浦義行 (2000) 舞踊における動き (body action) の質 (quality) を評価するための主観的尺度の構築：動的力性 (kinetic force) の観点から. 体育学研究, 45 (1) : 54-64.
- 国立教育政策研究所 (2011a) 評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料 (小学校 体育). 教育出版.
- 国立教育政策研究所 (2011b) 評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料 (中学校 保健体育). 教育出版.
- 国立教育政策研究所 (2012) 評価規準の作成, 評価方法等の工夫改善のための参考資料 (高等学校 保健体育). 教育出版.
- 松本奈緒・寺田潤 (2013) 男女必修化時代の中学校ダンスの実施の現状と指導者の問題意識－秋田県保健体育教諭の研修レポートを参考として－. 秋田大学教育文化学部研究紀要, 教育科学部門, 68 (4) : 25-34.
- 松本富子・高橋健夫・長谷川悦示 (1996) 子どもからみたダンス授業評価の構造－中学校創作ダンス授業に対する評価の分析から－. スポーツ教育学研究, 16 (1) : 47-54.
- メリアム：堀薫夫ほか訳 (2004) 質的調査法入門 教育における調査法とケース・スタディ. ミネルヴァ書房.
- 三浦弓杖 (1984) 舞踊教師は体育教師か. 体育の科学,

- 34：37.
- 宮本乙女（2005）創作ダンスの学習における学習者によるパフォーマンス評価の研究. お茶の水女子大学附属中学校研究紀要, 34：65-86.
- 文部科学省（2008a）小学校学習指導要領解説 体育編. 東洋館出版社.
- 文部科学省（2008b）中学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房.
- 文部科学省（2009）高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編. 東山書房.
- 文部科学省（2013）第2節「表現運動系およびダンス」の具体的な指導内容. 学校体育実技指導資料第9集 表現運動系およびダンス指導の手引き. 東洋館出版社, pp.10-20.
- 文部科学省（2017a）小学校学習指導要領解説 体育編. 東洋館出版社.
- 文部科学省（2017b）小学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房.
- 文部科学省（2018）高等学校学習指導要領解説 保健体育編・体育編.
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407073_07.pdf (参照日：2018年10月19日)
- 村田芳子（2008）表現運動・ダンスの授業で身につけさせたい学習内容とは？：学習内容と「習得・活用・探求」の学習をつなぐ. 体育科教育, 56（3）：14-18.
- 村田芳子（2009）表現運動・ダンスの特性とその指導. 女子体育, 51（7.8）：8-9.
- 村田芳子（2011）資料用語解説「授業を変えるキーワード」. 村田芳子指導, 新学習指導要領対応 表現運動・表現の最新指導法. 小学館, pp.12-13.
- 村田芳子（2012）リズムダンスの特性を生かす指導のポイント. 村田芳子編著・指導, 新学習指導要領対応 表現運動・リズムダンスの最新指導法. 小学館, pp. 12-13.
- 中村恭子・浦井孝夫（2007）学習成果から見たダンスの教材特性の検討－生徒の学習評価の観点から－. 順天堂大学スポーツ健康科学研究, 11：10-20.
- 中村恭子（2009）中学校体育の男女必修化に伴うダンス授業の変容－平成19年度, 20年度, 21年度および24年度の年次推移から－. (社) 日本女子体育連盟学術研究, 26：1-16.
- 西村依子・川口千代（2007）「表現運動」の特性をふまえた評価票の提案. 京都女子大学発達教育学部紀要, 3：77-98.
- 太田一枝（2012）ダンスの評価規準と判定基準. 北尾倫彦監修, 観点別学習状況の評価規準と判定基準. 図書文化. pp.156-163.
- 朴京眞・村田芳子（2013）日韓のナショナルカリキュラムにおけるダンスに関する内容の比較とその改訂の背景：日本の「2008年学習指導要領」と韓国の「2007年改訂教育課程」を対象に. 体育学研究, 58（1）：151-180.
- 朴京眞・村田芳子・山崎朱音（2015）日韓の新ナショナルカリキュラムにおけるダンスに関する内容の具体化と比較検討：韓国の「体育」教科書を用いて. 体育学研究, 60（2）：715-736.
- Preston-Dunlop, Valerie (1980) A Handbook for DANCE IN EDUCATION. Macdonald & Evans Ltd.
- 寺山由美（2004）ダンス教育における自己表現について－「なりきる」を手がかりに－. 体育・スポーツ哲学研究, 26（1）：13-23.
- 寺山由美（2005）舞踊教育における学習内容の検討－特に小学校における「表現」に着目して－. (社) 日本女子体育連盟学術研究, 22：29-38.
- 山崎朱音・村田芳子・朴京眞（2014）創作ダンスの指導における指導言語の意味と動きをみる観点：教材「新聞紙を使った表現」を対象に. 体育学研究, 59：203-226.
- 與儀幸朝・金城昇・小林稔（2012）パフォーマンス課題・評価を取り入れたダンス授業の比較的研究－男性教員による男女共習における実践を通して－. 琉球大学教育学部紀要, 81：315-326.

（平成30年9月4日受付）
 （平成30年11月1日受理）

九州体育・スポーツ学会第68回大会
(令和元年 8 月31日～ 9 月 1 日 鹿児島大学)

発表抄録集

1. 特 別 講 演

特別講演

障害者スポーツのこれまでとこれから —体育・スポーツ経営学の視座—

演 者：武隈 晃（鹿児島大学理事・副学長）
司 会：西谷憲明（鹿児島国際大学）



演者の略歴

1958（昭和 33）年生まれ。神奈川県藤沢市出身。神奈川県立湘南高等学校卒、筑波大学大学院体育研究科修了。慶應義塾大学講師を経て2004（平成 16）年より鹿児島大学教育学部教授。2010（平成 22）年より教育学部長、2014（平成 26）年より鹿児島大学副学長、2019（平成 31）年 4 月より国立大学法人鹿児島大学理事・副学長。2016（平成 28）年より鹿児島大学稲盛アカデミー長を併任。専門は体育・スポーツ経営学

1. 企画趣旨

2020 年は東京オリンピック・パラリンピックが開催され、その直後に「かごしま国体・かごしま大会(全国障害者スポーツ大会)」が、開催される。「する」「見る」「創る・支える」それぞれの立場から、スポーツの international, national, local を短期間に体感できると思われる。本大会において、この絶好の機会に障害者スポーツの理解や県民スポーツ環境の広がりという視点とともに、「オリ・パラ」、「国体・障スポ」がスポーツにおけるインクルージョン、グローバル化、さらにはスポーツにおける格差是正にどのように機能するのか、すべきなのかについての検討を深めたく、「特別講演」を開催した。

2. 講演要旨

1. 2020 東京オリ・パラと鹿児島国体・障スポの意義

2020（令和 2）年は東京オリンピック・パラリンピックが開催され、その直後には国民体育大

会・全国障害者スポーツ大会が鹿児島で開催される。「する」「みる」「創る・支える」それぞれの立場から、スポーツの international, national, local を短期間に体感できる絶好の機会である。同時に障害者スポーツの理解やスポーツ環境の整備という視点とともに、56 年ぶりの「オリ・パラ」、48 年ぶりの「鹿児島国体・障スポ（当時は身体障害者スポーツ大会）」がスポーツにおけるインクルージョンにどう機能するかを省察する機会として捉える必要がある。

本学はグローバルな視点を有する地域人材、すなわち「グローバル人材」の育成に向けた教育改革を目指しており、スポーツにおけるグローバル化についても改めて検討を深める時期に至っている。

こうした事柄を踏まえた上で、本講演では日本における障害者スポーツの経緯について体育・スポーツ経営学研究の歩みと重ね合わせることで、検討した。

2. 日本における体育・スポーツ経営学の学的性格とその系譜

日本における体育・スポーツ経営の研究対象は1970年頃までは体育におけるモノやヒトの一般的な管理（法）に焦点化され、それゆえにスポーツ（運動）を行なう人の特性に論及することは希であり、いきおい「障害者スポーツ」に特化した研究は稀有であった。

70年代に入るとヒトを「運動者」として再定義し、その行動や生活に照準を定めるようになる。このことから「豊かな運動生活」を基本価値に置き、それを保障するスポーツ環境の中核を構成する「体育・スポーツ事業」が斯分野のパラダイムとして位置づくようになる。ただ障害者スポーツに係る研究は障害児の体育的活動や一部のスポーツ施設における障害者スポーツの活動実態が報告されるものなどに限定された。

80年代には体育・スポーツ経営の展開される領域、すなわち、学校、地域、職場、スポーツ施設、などの領域論とともに「高齢者」、「女性」、「子ども」など対象者の属性に特化した研究が台頭した。合わせて「する」とどまらないスポーツへの参与、即ち「みるスポーツ」に照準を合わせた研究がみられるようになる。この段階では多様なスポーツへの関わりを意味する「豊かなスポーツ生活」を基本価値とする体育・スポーツ経営論が展開された。

90年代に入ると、個別領域を越えた「スポーツ生活経営」論が台頭し、機を一にして「障害者スポーツ経営」研究が本格化する。2000年以降に興隆をみる障害者スポーツ研究が耳目を集めることは周知の通りである。

3. 三つの origin 再考

1894年6月23日、パリ・ソルボンヌにおけるIOC設立において「オリンピズムとその諸価値に従い、スポーツを実践することを通じて若者を教

育し、平和でより良い世界の建設に貢献すること」がオリンピック・ムーブメントの目的としてP.D.クーベルタンにより謳われた。1948年7月29日、退役軍人のリハビリテーションを行うストック・マンデビル病院において、パラリンピックの原点となるアーチェリー大会がグットマン卿によって開催さる。2001年6月19日にはスイス・ローザンヌにおいてIOCサマランチ会長とステッドワードIPC会長によって、協力関係に関する基本合意が取り付けられた。それぞれ間に約50年の歳月を要しているが、三つのoriginに画期としての新たな価値を見いだすことができる。

4. 格差是正のスポーツ経営学

90年代当初に1%に満たなかった日本の障害者スポーツ人口は四半世紀で約20倍に拡大したが、未だその比率は一般のスポーツ人口の半分に届かない。スポーツにおけるノーマライゼーションとインクルージョンの実現は、未だ道半ばである。

経済格差が健康格差、学力格差、体力格差を生むという負のスパイラルは、解消どころか、拡大・容認の方向に進んでいるようにもみえる。

体育・スポーツ経営学がスポーツ経営現象の学術的な記述に止まらず、体育・スポーツ政策提言の学を標榜するならば、スポーツ経営学のもう一つの使命は、こうした格差是正に政策的な提言を図ることが出来るかにかかっているとと言える。

障害者スポーツの展望を拓くことができるか、体育・スポーツ経営学の試金石がここにあると言ってよいのではないか。

2. 全体シンポジウム

<全体シンポジウム>

大学スポーツ協会（UNIVAS）発足で何が変わるか、変わったか？

シンポジスト： 池田敦司（仙台大学、（一社）大学スポーツ協会専務理事）
 小林勝法（文教大学、（公社）大学体育連合顧問、
 （一社）大学スポーツ協会理事）
 橋本公雄（熊本学園大学）
 メインコメンテーター：松下雅雄（鹿屋体育大学学長）
 コーディネーター： 斉藤篤司（九州大学）、熊谷賢哉（長崎国際大学）

1. 企画趣旨

平成 31 年 3 月一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）が発足した。平成 30 年 9 月から翌年 2 月まで、月 1 回の設立準備委員会が開かれ、105 大学と 26 競技団体とともに、九州からも 10 大学が委員会に参加してきた。しかし、最後までその意義が腑に落ちないまま今日に至ったのではないだろうか。加盟大学は何ができるのか、何をしなければならないのか、何が提供されるのか。また、九州には 70 年の歴史を持つ九州地区大学体育協議会が存在し、九州の大学スポーツの発展に寄与してきた。発足後 6 ヶ月たった今、様々な立場から、その意義が話し合われることを期待して、実際に取り組んでいるシンポジストの方々にお話をいただいた。

2. 発表要旨

「UNIVAS で何が変わる」

池田敦司氏

平成 31 年 3 月 1 日社団法人として発足した大学スポーツ協会（UNIVAS）ですが、その誕生の発端は 3 年前に遡ります。平成 28 年 4 月 26 日に文部科学大臣により「大学スポーツの振興に関する検討会議」が開催され、学識経験者、一般有識者による検討が開始されました。国の成長戦略においてスポーツの活用と市場拡大はひとつの重

要なテーマであり、そのスポーツにおいてこれから発展の可能性を大きく秘めているものが大学スポーツではないか？との課題認識に基づくものでした。その当時から、大学スポーツに対する社会的評価は、一部の競技、一部の大会のみが活性しているに過ぎず、任意の活動や個の活動と位置づけられていたりし、大学スポーツ総合体としての実態は不透明であるとの見方がほとんどでした。一方では、競技者、指導者、指導ノウハウ、競技施設等恵まれたアセットを有しているのに、潜在性は充分に有しているとの評価もされました。

検討会議における 1 年間の検討の結果、とりまとめの提案がされました。提案では、大学スポーツの振興に向けて、大学として部活動にガバナンスを発揮すること、その為に部活動を統括する組織・人材を配備すること、資金調達力の向上、学生アスリートのデュアルキャリア支援等が提言されました。また、大学横断型且つ競技横断型組織、所謂日本版 NCAA の設立の必要性も提起されました。民間法人として、大学・学連の任意参加による、既存の活動を阻害せず調和をとる、会員にメリットを提供する組織として要件も定義され、その後「学産官連携協議会」、「組織設立準備委員会」といった検討プロセスを経て 100 名以上の大学関係者、スポーツ関係者、一般有識者の討

議が行われ、誕生に至りました。

UNIVAS 誕生から6か月余り、会員も222大学、34競技団体となりました。初年度はデュアルキャリア（学業充実）、安全安心、事業マーケティングの3分野で、5つのテーマ14のプログラムの実現を掲げています。

第一は「組織体制の整備改革」です。大学横断的、競技団体横断的なUNIVASの組織体制を実効的なものにしていくこと、及び大学において部活動・スポーツへの関与・統括を促進していくことに取り組みます。第二、第三には「学業充実・人材育成」「安全安心な競技環境整備」といったまさにインフラとも言える課題の解決に向けて取り組みます。入学前からの教育プログラムや、アスリートのキャリア形成の支援プログラムの提供、安全安心分野においては、ハラスメント等に関する学生相談窓口の設置、安全安心ガイドラインの提示等を進めております。第四、第五として「大学スポーツのコンテンツ価値の向上」「データベースの構築」を目指しております。競技横断型で大学のスポーツ総合力を競うUNIVASCUP2019を6月より開催しておりますが、その大会を中心にUNIVASホームページにて熱戦の様相を無料で動画配信しています。今まで見る機会がほとんどなかった競技・大会も視聴可能となり、より多くの人々に大学スポーツ存在を認知してもらうことを目的としています。また、「データベースの構築」に関しては、今まで統一に管理できていなかったものを統一化し、データに基づいたサービスを学生アスリートに提供していくことを目指しています。データ化することによって解析、研究、改善が可能となり成果をまた学生アスリートに還元していけるようになります。

まずは、大学横断、競技横断で取り組むべきこと、セントラルオペレーションだからこそ出来ることを中心に活動を進めていきます。大学スポ

ーツの振興に向けてより実態的な活動にしていくためには、各大学の実情、各地域の特徴を踏まえた会員の皆様の創意工夫や、その意見の反映が必要であります。ご理解の程と今後のご協力よろしくお願いいたします。

「カンファレンス（地域リーグ）制による大学スポーツ改革」

小林勝法氏

文部科学省の「大学スポーツの振興に関する検討会議」（2016年度）が出した結論は、「日本版NCAA（大学横断的かつ競技横断的統括組織）の設立を目指す」であった。競技ごとに学連が並び立っている縦割り構造を改革するものと期待したが、2年間の検討・準備を経て出来上がったUNIVAS（大学スポーツ協会）は構造改革を伴わず、中央集権的組織であり、NCAAというより英国の大学スポーツ統括組織BUCS（British Universities & Colleges Sport）に近い。競技横断大学対抗戦のUNIVAS CUPは、総合成績を競うというBUCSの方式と同じである。このままでは、関東や関西のスポーツ強豪校は栄えるかも知れないが、中小規模大学、特に地方の大学には恩恵が少なく、地域活性化にも貢献しない。

NCAA本部は放映権料などで2018年度の歳入は8.4億ドルにも及んでいる。しかし、Division I（1部）は103.9億ドルで、NCAA本部の12倍を超える収入を得ている。Division Iには50のカンファレンス（地域リーグ）、351大学が所属しているが、そのうちのBig Tenカンファレンス（14大学）は16.3億ドルの歳入であった。1つのカンファレンスだけで、NCAA本部の約2倍の歳入である。日本でも有名なアイビーリーグはハーバード大学やイェール大学などの名門私立大学のグループであるが、これは、日本のMARCHのような学力偏差値グループではない。名前の通りスポーツリーグで、16競技のリーグ戦を行っている。日本では競技毎に所属するリーグが異なり、対戦相手も

シーズンによってまちまちであるが、カンファレンスではそのようなことがないので自ずからライバル意識が高まる。この仕組みによって、カンファレンスと大学のブランド力が高まり、在学生や保護者、地域住民から応援され、資金調達ができている。

すなわち、米国の大学スポーツは、大学—カンファレンス—NCAA 本部という3層構造になっていて、カンファレンスの数は142、大学数は1,117である。UNIVAS は言わば日本版 NCAA 本部であって、地方組織（カンファレンス）が設立して初めて、日本版 NCAA が完成したと言える。

米国の大学スポーツの発展史を見ると、1852年に全米初の大学対抗戦がボート競技によっておこなわれた、対抗戦が盛んになった結果、1871年には全米初の学連として、大学ボート連盟が設立された。そして、1895年には全米初のカンファレンスが設立し、1906年にNCAAの前身が設立した。日本も同様の発展をしてきたが、異なるのはカンファレンスの設立を飛び越してUNIVASが設立した点である。日本でもカンファレンスができ、地域の大学同士が交流することによって若者が地域にとどまり、キャンパスと街が活性化することを期待している。

「UNIVASによる大学スポーツの活性化
—九州地区大学体育協議会の立場から—

橋本公雄氏

UNIVASによる大学スポーツの活性化—九州地区大学体育協議会の立場から—
橋本公雄（熊本学園大学）

九州には3つの体育・スポーツを推進する組織がある。それらは研究組織としての「九州体育・スポーツ学会」、大学体育教育組織としての「九州地区大学体育連合」、そして大学スポーツ促進組織としての「九州地区大学体育協議会（略称、九

体協）」であり、それぞれ約70年の歴史と伝統を有している。本シンポジウムでは、九体協の立場からUNIVAUの大学スポーツの活性化に関し問題提起を行った。

わが国の学校運動部活動は明治時代に始まり、人間形成を図る教育の一環として位置づけられ、学生の自治活動とはいえこの視点は現在も一貫して継続されている。よって、2010年に提案された「日本の展望—学術からの提言2010」のなかにも課外活動の意義と重要性が明確に記されているのである。世界に稀にみる教育システムが組み込まれているのである。

九体協は大学の体育・スポーツの普及、発展に寄与するとともに、九州地区大学相互の親睦を図ることを目的としており、九州の約9割の大学・短大が加盟し、九州地区大学体育大会（通称インカレ）やリーダーシップ・トレーニング研修会を開催し活動を行っている。まさに、UNIVASが標榜する大学横断型・競技横断型のスポーツ組織なのである。

しかし、インカレ参加者数は近年減少傾向にある。参加者数の減少の原因は各大学における運動部活動離れ同好会・愛好会所属傾向が進行し、部活動入部者の減少でチームが組めず九州インカレに出場できないからである。そこで現在、活性化に向けて、大学院生の参画、新種目の導入、大学総合ポイント制の導入、開会式の開催等々さまざまな改善・改革がなされているところである。大学スポーツを活性化する意味は大学への貢献もある。現在大学進学率は50%を超えユニバーサル化している。私学や短大では学生定員割れを起こし、学生の質の低下を招いている。よって、学習不応、大学不応、退学の問題等々が起こり、現在の学生には学業一辺倒では難しい状況にある。そこで、その方策の1つとして考えられるのが、学術会議で示されているように課外活動を充実させキャンパス・ライフをエンジョイさせるこ

とであり、大学におけるスポーツ文化の醸成が重要な要素と考えるからである。

現在の UNIVAS の進め方では、運動部活動への二重構造、課外活動へ教育的指導、アドミニストレータの配置題、加盟金の二重払い（UNIVAS と九体協）など多々課題が残されている。おそらく中小規模の大学や短大はメリットがなければ UNIVAS には加盟しないと思われる。また、UNIVAS への加盟大学が増えると、九体協からの脱会が起り、むしろ大学スポーツの非活性化へ拍車がかかると推測される。

そこで、下記の 2 つの問題提起を行った。

1. 大学規模での分類の必要性。現在は大規模大学、強豪チームを有する大学中心に推進しているので、学術会議の提言に沿っていない。九体協はまさにこの路線を進めている。
2. スポーツ文化の興隆促進。大学スポーツの活性化のためには大学にスポーツ文化を興隆する必要がある。九体協では、学生も九州インカレに尽力しているところである。

3. 第1・第5専門分科会シンポジウム

第1・第5専門分科会シンポジウム

コーチングにおける「理論と実践」の往還について

演 者：濱田 雄仁（鹿児島大学大学院）、沼田 薫樹（鹿屋体育大学大学院）
秋山 大輔（九州産業大学）

司 会：第1分科会 萩原 悟一（鹿屋体育大学）・第5分科会 府内 勇希（熊本学園大学）

1. 企画趣旨

競技スポーツにおいて「パフォーマンス向上」に関する技術革新はめざましく、選手の技能向上にも目を見張るものがある。さらに、ライバルや強豪相手、格上のチームと伍するためにどのような工夫があり、レベルアップや記録向上を図っていくかについては、特に興味を惹かれる。また、実践の場で達成された新システムや新しい技術・技能などの効果については、分析と解釈を経て一般的な方法として理論化されることが望まれる。

本シンポジウムにおいて、新進気鋭の学生コーチや院生コーチの方々に自由闊達なトピックスを提供していただき、新時代のコーチングについて話し合う機会とした。

2. 発表要旨

「合理的な野球動作の指導法について」

濱田雄仁氏

現在、野球動作に関しては、バイオメカニクス研究を中心に多くの知見が得られている。野球動作の指導において、それらの知見に基づいた科学的な介入が望ましいが、設備や環境などの様々な要因により困難なことが多い。

そこで私は、合理的な野球動作の指導法として、簡易な撮影デバイスを用いた高校野球におけるコーチング実践例を報告した。投手 A と投手 B を対象に、iPad で撮影したスロー動画をを用いて投球動作の観察評価を行ったところ、投手 A では体幹の回旋・捻転動作の不足が観察された。また、投手 B では踏込脚の

膝が接地前後から前方に割れていることが観察できた。そこで、投球動作における運動連鎖の改善を目指し、両投手の問題点への指導を行った結果、指導後では投手 A と投手 B の内省および投球動作に改善がみられた。

簡易な撮影デバイスは指導現場で活用でき、3次元動作解析などの高精度な観察評価に比べると劣るものの、指導者が科学的な知識を有することで、合理的な動作指導を行うことができる。しかしながら、動作の定量化が困難であるため、指導者の主観が強く反映され、誤った指導に繋がる可能性がある。従って、指導効果の検証は不可欠である。

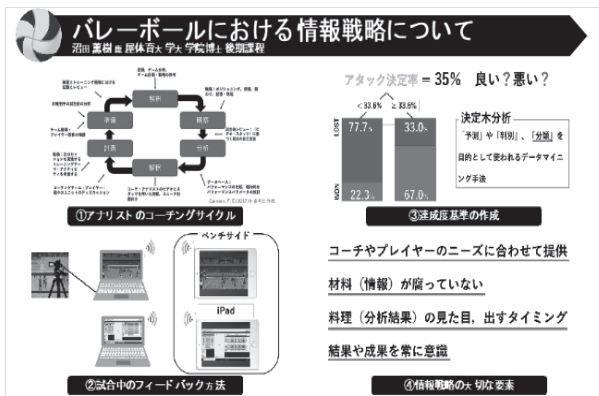
指導現場において、科学的な根拠に基づいた実践データを集積し、理論と実践の往還を図ることは、コーチングにおける共通した観点を構築することを可能とし、合理的な野球動作の指導法の確立に繋がると考える。

「バレーボールにおける情報戦略について」

沼田薫樹氏

様々なスポーツでは、アナリストと呼ばれる情報戦略スタッフがゲームパフォーマンス分析を行っている。アナリストの活動は「Interpretation（解釈）」、「Observation（観察）」、「Analysis（分析）」、「Interpretation（解釈）」、「Planning（計画）」、「Preparation（準備）」を循環させたコーチングサイクルによって成り立っている（Carmen. F. R. et al., 2017）。バレーボールにおけるアナリストは Data Volley（Data Project 社）と呼ばれる分析ソフトウェアを

用いる事が主流となっている。また、評価する項目は大きく分けてサーブ、レセプション、トスアタック、ブロック、チャンスがある(日本バレーボール協会, 2004)。試合中はこれらの評価項目を用いて即時にベンチサイドにある iPad へ情報が転送され、同時に録画している映像をソフトウェアによって 7~10 秒遅延させ、ベンチサイドへ送ることによってラリー終了直後の状況をフィードバックしている。これまで、評価項目は優勝したチームあるいはコーチの経験則から目標値を定めていた。しかし、沼田ほか(2019)による決定木分析を用いた手法によって各評価項目における達成基準が作成された。これによって、練習計画やコーチングにおいて具体的な数値を用いた指導ができると推測できる。



「ICT を活用したコーチングの実践における効果と課題」

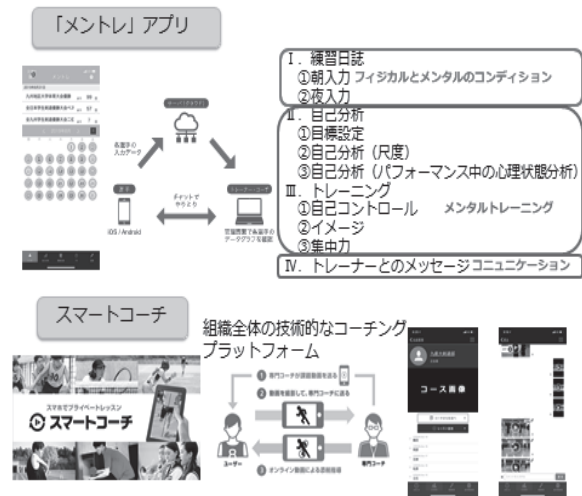
秋山大輔氏

コーチングでは、個別対応(tailor made)、現在進行形(ongoing)、個別対応(interactive)の3つの原則が重要だと考えられ、スポーツの現場において、これらを十分なレベルで行うことが理想である。しかし、大学スポーツでは、限られた数名のコーチングスタッフと多数の部員で組織されるケースが多数を占める。

多数の学生の心理的、身体的コンディションを把握し、科学的な知見に基づいてメンタルトレーニングを可能にしたのが、行動評価システム研究所の「メントレ」

アプリである。本アプリでは、朝夜2回の練習日誌入力時に体重や怪我などの身体的コンディションとPOMS、二次元気分尺度の心理的コンディションを入力する。日々の自分のデータを可視化し、自己分析を習慣化することによって、コントロールする能力をトレーニングすると同時に、管理者であるコーチは全体のデータを把握することができる。入力された組織全体のデータ、積み重ねられた個人のデータを統計的に処理し、ある項目と競技力の相関関係の分析や、個人の変化を分析することも可能である。これは、それぞれの競技に適切なトレーニング方法を構築する可能性があると考えられる。

また、ソフトバンク社の「スマートコーチ」では、送られてきた部員の動画に対し、音声と線や図が記録された指導動画を返信することが可能である。組織全体を一つのプラットフォームで管理することは閲覧が容易であり、個々の変化に対する分析に優れていることが示唆された。



4. 第2・第4専門分科会シンポジウム

第2・第4専門分科会シンポジウム

第1部 田口正公先生，田中宏暁先生を偲んで

演者：高瀬幸一（名桜大学），西田裕一郎（佐賀大学）

司会：田原亮二（西南学院大学），東恩納玲代（名桜大学）

1. 企画趣旨

第1部は、九州体育・スポーツ学会の発展に多大な貢献をされた、田口正公先生、田中宏暁先生を偲ぶ追悼企画とした。田口先生、田中先生の研究活動をプライベートなエピソードも織り交ぜつつご紹介いただき、今後の九州体育・スポーツ学会の発展に寄与する研究活動を考える機会とした。

2. 発表要旨

「田口正公先生を偲んで」

高瀬幸一氏

はじめに、田口正公先生の略歴、学会活動、社会活動などをご紹介いただいた。研究内容は、大きくわけて水泳競技のバイオメカニクス的研究と競技者・高齢者の筋機能特性に関する研究の2つであった。この2つの研究をもとに、現場と研究をつなげる活動を積極的に行い、本学会でのご活躍として理事の歴任、第5専門分科会の立ち上げ、功労賞受賞、名誉会員など様々な功績を振り返ることができた。次に、田口先生と主に行われた、当時(1990年頃)としては大変貴重であった油圧式の等速性筋力測定装置(KIN/COM)を使用した共同研究が示された。夕方は自宅に帰り、家事育児を済ませたらまた大学に戻って研究を行い、朝は部活動の指導をされていた田口先生の温厚でありながら、教育や研究に対する熱意を再認識する機会となった。

「田中宏暁先生との研究の思い出-NO(エヌオー)とSAGE(セイジ)-」

西田裕一郎氏

田中宏暁先生の研究への取り組みを、測定時のやり取り等多数のエピソードを交えながらご紹介いただいた。今回は、内皮(またはNO[Nitric Oxide])依存性血管拡張反応に関する研究、乳酸閾値強度のトレーニングが骨格筋の遺伝子発現に及ぼす効果に関する2つの研究活動時のエピソードがメインであった。田中先生の長年の研究テーマとも呼ぶべきニコニコペース時の骨格筋遺伝子の機序では、特に代謝系の遺伝子の発現が活性化することが示されている。「研究は楽しく！」がモットーで、やれることをやるのではなく、興味のあることに邁進し、時には自らが被験者となることもあった田中先生の研究への情熱を改めて認識することができた。常に human first, strategy second であり、研究は強力で推進するが、遊びも大事にする田中先生の研究活動を振り返る機会となった。

第2部 自然科学系論文の執筆術

演 者：道下竜馬（福岡大学）

司 会：田原亮二（西南学院大学）、東恩納玲代（名桜大学）

1. 企画趣旨

第2部は、自然科学系の論文を執筆する時のポイントについてレクチャーしていただいた。これから論文を書く大学院生を中心に執筆意欲を高めていただき、九州体育・スポーツ学研究の掲載論文数増加に繋げることをねらいとした。

2. 発表要旨

研究活動は、新しい知見を世の中に発表し、今後のスポーツ・医・健康科学の発展に貢献するものである。学会発表を行い、様々な分野の研究者から意見をもらうことは、確かに重要なことではあるが、自分が成し遂げた研究成果を形として後世までに残していくものが学術論文である。分野によって論文の表現方法や体裁は大きく異なるが、どの分野においても論文を執筆するうえで共通するマナーがある。論文を書くからには、その内容を読者に十分に理解してもらうことが重要となってくる。今回は、①論文を書き始める前に、②研究を実施するうえでの注意事項、③まずは書き始めよう、④論文の基本型とポイント（要旨、緒言、方法、結果、考察、文献、図表、etc）、⑤論文投稿から採択までの流れ、⑥論文の採択基準、の流れで論文を執筆するうえでの初歩的なポイントについて概説した。ポイントとして、まず書き始めることが大事！緒言は無駄にダラダラと長いよりも、短いほうがインパクトが強い、図表は文章に勝る（単位や図表の説明を忘れずに！）、結果の意味づけ（これまでの研究結果と異なっている点、新しい知見は？）、まとめと目的の整合性がとれるように明確に歯切れの良い

言葉を使って書くことなどを分かりやすく解説された。また、投稿に際しては、謝辞は本来その研究を行うにあたって、積極的に進め、あるいは技術的に貢献した人たちの名前をその旨を伝えて許可を得たうえで書くものであること、基本ではあるが投稿規定はしっかり読んで規定に沿って論文を作成すること、図表は1ページにつき1点記載すること、利益相反を明記する。さらに、投稿論文に添える editor への手紙も採択されるためには大事であることが示された。論文投稿後、不採択になった場合、論文を放置してしまわずに、自分の論文を正しく評価してもらえるように勇気を出して再チャレンジする心構えが重要であること、査読者が変わることで評価してもらえることもあることがアドバイスされた。

全ての研究者には、研究成果を発表する事によって、その内容についての責任が生じる。独りよがりでない論理性と主張の明快性をもって、適切な語句や記述法を用いて発表することが要点として示された。また、これらのことは学生の論文指導にも共通のことであること、指導者にとっての論文添削は一作業にすぎないかもしれないが、学生にとっての論文執筆は大変な作業であるため、指導者は学生の論文添削を優先し、良い論文が投稿できるようにサポートすることが重要であることが指導教員としての留意点として示された。これから論文を執筆する大学院生を中心に講話して頂いたが、論文指導にも活かせる内容であった。

5. 第3専門分科会シンポジウム

第3 専門分科会シンポジウム

小学校体育における「主体的・対話的で深い学び」に向けて

演 者：當房 省吾（鹿児島大学教育学部附属小学校教諭）
 木村 翔太（東京学芸大学附属世田谷小学校教諭）
 松本 大輔（西九州大学）
 司 会：黒原 貴仁（鹿児島女子短期大学）

1. 企画趣旨

2017年に告示された学習指導要領において、「主体性・多様性・協働性・学びに向かう力・人間性等」「個別の知識・技能」「思考力・判断力・表現力」の三つの資質・能力を柱とし、「主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善」「カリキュラム・マネジメント」を関連させることにより、カリキュラム・デザインを検討するという新たな視点が出された。すなわち、これまでの内容中心のコンテンツベースの学習から、資質・能力を中心としたコンピテンシーベースの学習へと転換が図られている。

こうした学習観の転換に伴い、授業の姿として「主体的・対話的で深い学び」の実現が重要視されている。一方で「主体的・対話的に“何を”学んでいくのか、教師がどのように関わっていくのか」といった実践及び研究レベルでの課題も多い。そこで、本シンポジウムでは、①コンピテンシーベースにおける質の高い体育授業とはどんな授業なのか、②コンピテンシーベースの体育授業における授業改善の指標とは何か、の2点を柱として議論を進めた。そして、体育授業における「主体的・対話的で深い学びの」の実現に向けた授業及び研究の新たな視点を創出することを目指した。

2. 発表要旨

「体育科の見方・考え方を働かせた深い学びを促す学習指導の実践」

當房省吾氏

学習指導要領が改訂され、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を図ることが求められている。しかし、主体的・対話的で深い学びの実現といえども、学校現場において、授業の何をどのように変えていけばいいのかは分かりづらく、日々試行錯誤している。小学校では、体育・保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、豊かなスポーツライフにつながる資質・能力を培っていくことを目指すとされている。体育の見方・考え方とは、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」とある。ここで言う見方・考え方とは、豊かなスポーツライフを実現していく際の行動や関わり方の視座となるような大きさの見方・考え方であろう。学びの連続性でいうと、小学校段階の具体的な1単位時間の授業の中で働かせていくには、もう少しブレイクダウンしていく必要性を感じる。本校では、体育の見方・考え方を、課題を把握・解決する5つの視点（力の入れ具合、タイミング、位置、方向、姿勢）や視点によって捉えた課題等を解決するための思考の枠組み（比較、関係付け、省察）として具体化し授業実践を行った。さらに、汎用的な力として資質・能力が高まっていくためには、自らの問いを基に学んでいくことが重要である。現在、課題意識を連続させる指導方法に取り組んでいる。「自分の動きは目指す動きと比べて

どうか「解決するためにはどうすればいいか」といった課題意識が体育でいう問いだと考えている。

「「学びの終点」から「学びの起点」となる授業づくり」

木村翔太氏

「大学では授業の目的が大切だと教わってきましたが、授業の目的とは多少ずれていたとしても、そこに児童の気づきがあるならそれは授業において一番の収穫なのではないでしょうか」。これは、私が担当した教育実習生の日誌の一部である。ここには、実際の教育現場に臨んだからこそ得られた価値ある学びが表現されている一方で、子どもの自由を尊重するあまりに学びの深まりを担保できない浅い授業へ繋がる陥穽が潜んでいるようにも思える。

“教え込み” vs. “放任”。この対立は、我々教師がしばしば陥ってしまうジレンマの両極であり、これまで体育科教育の授業実践や研究団体が互いのスタンスをネガティブな意味で表現する際に使用されてきた。この対立はいかにして解かれ、望ましくは弁証法的に止揚されていくのだろうか。今回は、そのような問題意識のもとその解決の糸口となる試みを紹介した。即ち、授業のねらいの意味合いを「～を学ぶ」から「～について学ぶ」へと変えてみるということである（後者の「～」には種目の特性に応じた問いが入る）。前者では、固定的なもの（既存の知識や技術）を身に着けることがねらいとなるが、後者では、“教え込み”ではなく、ある問いについて子ども一人ひとりが主体的に探求することがねらいとなる。そして、“放任”ではなく、探求するテーマが明示され共有されることにより対話が促され、個々人の学びが集団の学びとして集積され深い学びに繋がるのである。

この変化は、大きくは、学校教育の役割が子どもにとっての学びのゴールを示すことではなく、学びのスタートを示すことであるということに繋がるのではないだろうか。

「主体的・対話的で深い学び」の評価とは？」

松本大輔氏

2017年告示の学習指導要領において、主体的・対話的で深い学びとしてのアクティブ・ラーニングやカリキュラム・マネジメントが注目されている。その背景にあるのは、学習のコンテンツベースからコンピテンシーベースへという転換である。こうした学習の転換においては、学習そのものが学習者の論理によって捉えられる重要性が示唆されている。つまり当事者性による学習である。そうした学習を評価するという行為自体も学習者の当事者性との関係で捉えられるべきではないであろうか。そもそも評価とは、学習者の学習の促進と授業の改善を目的に行われるものであり、学習と評価の一体化とは本来、学習の促進と指導改善の視点が一体となって授業を改善していく教育的営みであると考えられる。しかし、評価の問題においては評定の問題へと矮小化されて捉えられてしまう傾向があり、そのため指導と評価の一体化は、「評価（評定）できないことは指導しない」という現象が起き、学習者の豊かな学びが捨象されているといえる。いわば評定の問題故に授業自体が指導者の論理によって行われるという問題点である。これでは主体的・対話的で深い学びの実現は困難であろう。こうした問題に対して、三宅（2013）の「変革的形成的評価」の考えやクリエイティブラーニング（井庭ら,2019）における「自己評価としての評価」を基に、評価を価値の創造と共有と捉え、学習者と教師が常に対話を通して授業の中で評価基準・規準をライブ的に創ることと（学習者の学習促進と指導の改善として）、その創られた基準・規準から学習者自身が自ら自己評価を行うこと（学習者自身の自己教育力の育成として）、そして、その自己評価を中核に評定を行う（自己評価と他者評価の相互から学習を多角的に評定する）評価論について提案した。

6. 研究推進委員会企画テーマ 1

「子どもの行為に基づいた運動遊び展開モデル」を媒体にした 保幼小接続に関する事例研究

西田明史（西九州大学短期大学部） 松本大輔（西九州大学）

キーワード：運動の学習位相、インストラクショナル・デザイン、保育ドキュメンテーション、幼児理解

1. 目的

これからの幼児教育では、新しい時代に求められる資質・能力の育成に向け、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を踏まえた教育課程が編成され、子ども理解に基づいた省察と評価による教育活動の質向上を図りながら、遊びを通した総合的な指導が展開される。本研究では、幼児教育・保育現場における実際の活動場面から抽出した子どもの遊び（学習）行為を分析し、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を考慮した運動遊びのあり方に関する事例や知見を収集する。幼児期の運動遊びの実践・指導に関する課題を明らかにすることを目的とする。

子どもの行為に基づいた運動遊び展開モデル

2018(平成30)年4月1日から施行されている幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂（定）の要点、ならびに運動学習や授業設計の理論を参考とし、「環境を通した保育」「子どもの主体性」「活動の連続性」を引き出す実践・指導法を検討した。幼児が運動遊びに取り組む際には、遊びと「出会い」「確かめる」「選ぶ」「作る」「思う」「挑む」「感じる」「探る」「わかる」「試す」「できる」行為を螺旋的・反復的に繰り返すことができるような実践・指導が必要だと考えた。

2. 方法

観察対象は、S県内私立幼保連携型認定こども園5歳児クラス（在籍者21名と経験11年目の保育者1名）であった。2019年5月上旬から7月上旬において、午前中のクラス活動時に実施された約20分間の「鬼ごっこ」の計8回を観察した。その際、手に保

持したデジタルビデオカメラ1台を用いて場面全体が映るように撮影した。観察後、撮影した動画を加工して保育ドキュメンテーションを作成し、観察対象にフィードバックした。観察者と保育者による活動の省察を経て、事例（エピソード）を書き起こした。収集した事例と「子どもの行為に基づいた運動遊び展開モデル」を照査し、遊びの中に見られる子どもの学びを考察した。

3. 結果と考察

1回目の活動において幼児らは、経験の中から取り組みたい鬼ごっこを選択・決定し、ルールについて話し合い、実践を通して理解していく中で遊びに期待を寄せていた。2・3回目では、「捕まらないこと」に意識が向いていたコ（逃げる）役の幼児らがタイムゾーンの中から出なかったため、事前に合意したルールが活動後半で覆った。4回目は、タイムゾーンを出なければならぬ「きっかけ」がルールに設けられたため、コ役の幼児らの意識は、「捕まらない」から「逃げる」へと変わっていった。5回目では、「捕まえる」「逃げる」の上手くいくやり方を試行・追求する幼児らの姿が見られた。6回目では、幼児らは、作戦会議を開いて、状況に応じた上手くいくやり方を類推・整理していた。7・8回目では、これまでの出来事を共有しながら、遊びの楽しさの要因や構造の理解が進み、保育者が見守る中、幼児らのみで活動を実践していた。

作成したモデルを活用して全8回の活動を振り返った結果、幼児らが関心事や経験を手掛かりとしながら遊び込む姿を読み取ることができた。

7. 研究推進委員会企画テーマ2

高校体育授業における投動作改善を目的とした授業実践

村上光平（鹿屋体育大学大学院） 前田 明（鹿屋体育大学）

キーワード：ハンドボール投げ、投能力、ICTの授業活用、学習効果

1. 目的

本研究では、高校生の投能力向上のためにICTを用いた投動作の改善を授業内で実践し、その効果を検証することを目的とした。そのために「①高校生の投動作の特徴を投能力の高い生徒（上位群）と低い生徒（下位群）との比較検討から明らかにする」「②①の知見を動作の改善点としてICTを用いて授業を実践し効果を検討する」の2つのプロトコルを設定した。

2. 方法

①では、県立高等学校の男子生徒136名を対象とし、ハンドボール投げの試技を高速度カメラにて300fpsで撮影した。②では、ソフトボールの单元内において、単元の最初の授業でハンドボール投げの測定を実施した(PRE)。その後、週1回の授業内において、1.動作の撮影、2.映像(動作)確認・協議、3.動作の再撮影、4.改善の確認といった、1~4の一連を授業として実施した。そして最後の授業でPRE同様にハンドボール投げの測定を実施し(POST)、投能力の変化、動作の変化を検討した(写真1)。

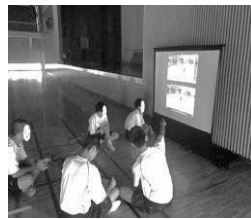


写真1.授業の様子

3. 結果

①高校生の投動作の特徴について

上体後傾角度、投球腕上腕角、投球腕前腕角度の3つのパラメータにおいて、上位群と下位群の間に有意な差がみられた(図1)。



図1.違いの見られた動作パラメータ(左から上体後傾角度、投球腕上腕角度、投球腕前腕角度)

②授業実践の効果検証について

単元前後で投距離に大きな変化はみられなかった(PRE: $22.8 \pm 4.6\text{m}$, POST: $23.3 \pm 5.1\text{m}$)。また、3つの動作パラメータについても大きな向上はみられず、ネガティブな結果もみられた。そこで、個人内変動を検討すると、投距離の向上を示した生徒は、比較的初期値の高い生徒であることが明らかとなった。動作パラメータの変化についてもすべて向上していた(図2)。内省調査においても、初期値の高い生徒からは、ICTによる学習効果を感じられる内容が多かったのに対し、初期値の低かった生徒からはネガティブな意見が多かった。

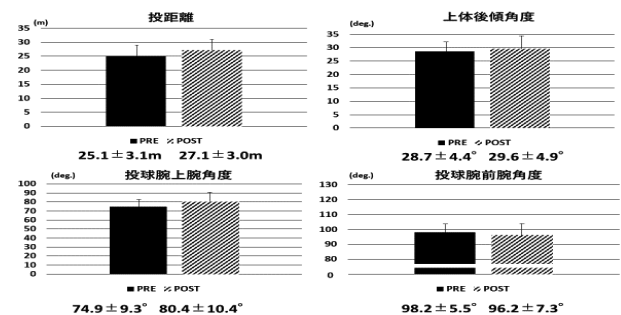


図2.初期値の高かった生徒の投距離及び動作

4. 考察

本研究の結果および内省調査から、ICTを授業で活用することで投動作の改善が促され、投能力を向上させる可能性は示唆されたが、対象の生徒の実態等を考慮した活用方法を検討したうえで授業展開していく必要があることが示された。

8. トピック・セッション1

地域住民の健康への大学の貢献 -沖縄の長寿復活に向けたユニークな健康支援-

演 者 : 高瀬 幸一 (名桜大学)
企画・司会 : 中垣内 真樹 (鹿屋体育大学)

1. 企画趣旨

昨今、大学が地(知)の拠点として地域創成に大きく貢献することが求められている。体育・スポーツ科学において、特に健康・体力学分野では、地域住民の健康づくり・介護予防の側面から地域貢献が期待される。少子高齢化対策、健康寿命の延伸という立場から地域住民の健康支援に大学がいかに関与できるのか?をテーマに先進的に沖縄県内で展開している名桜大学での事例を紹介することとした。

2. 発表要旨

「名桜大学での取り組みについて」

第2期スポーツ基本計画を踏まえて、平成30年3月にスポーツ庁から公表されたガイドライン「スポーツ推進アクションガイド～Enjoy Sport, Enjoy Life～」において、地域住民を対象としたスポーツへの興味・関心を喚起する国の先進的事例となる取り組みとして、名桜大学の健康支援活動が「国内の大学の中で唯一」取り上げられ掲載された。その取り組みである大学と行政機関が連携し学生組織が中心で健康支援活動を実施する、誰でも「踊る!話す!盛りあがる!」ことができる、3DCGコンテンツを用いたユニークな健康プログラムの内容やその提供(支援)の仕組みについて紹介した。

【学生の地域への派遣】

名桜大学の公認学生団体である「ヘルサポ」のメンバーが地域に出向き、下記のプログラムを実施した。

①スポーツインストラクターの動作を画面上に再現し、様々な楽曲に合わせてエクササイズを実践で

きる3DCGコンテンツ「JOYBEAT: (株) エクシング製」を活用した運動プログラム

- ②健康測定(血圧、身体組成、血管年齢、骨強度等)
- ③健康測定の結果説明
- ④ゆんたく(健康の話題に限定されない座談会)

【その他の活動】

- ①ヘルサポによるウォーキングコース策定事業
- ②地域の健康づくりイベント等に参加し、健康測定の実施や運動プログラムの紹介
- ③北部生涯学習推進センターの1室に3DCGコンテンツを設置して、地域住民へ週1回、無料開放(学生がコーディネートを担当)

これらの具体的な活動を通して得られた効果は以下の通りである。

【個人的(住民)効果】

- ①参加住民の体脂肪低下等の健康増進効果
- ②特定健診の受診率増加等、住民の健康意識の向上

【社会・生活向上効果】

- ①学生が介入したことによる住民交流のさらなる活性化

【教育的(学生)効果】

- ①学生のコミュニケーション能力、職務遂行能力の向上
- ②学生として実際の行政事業に関われる貴重な体験

3. まとめ

現在この活動の仕組みは、沖縄県内の多くの市町村において活用され、地域住民の健康づくりやコミュニティの活性化の良きモデルとなってきている。

9. トピック・セッション2

学生の実践的指導力を高める具体的な授業取組

演者：高原 和子（福岡女学院大学） 西田 明史（西九州大学短期大学部）
 企画・司会：第3専門分科会自主企画（世話人：西田明史・松本大輔）

1. 企画趣旨

保育者・教員養成系大学、短期大学における専門教育科目について、学修成果を高める「学生の学び方-教員の教え方」の方略等について議論を進めた。

2. 発表要旨

「学生の〈学びの傾向性〉を踏まえた授業デザイン」

西田明史氏

本学の学生は、保育の実践場面に直接結びつきやすい学習に対しては前向きに取り組むが、福祉・教育の基礎的な学習には身近さをあまり感じていない。このような学びの傾向性に鑑みた授業のあり方として、「気づきの蓄積→知識・理論の学修→スキルの深化」の学修サイクルが必要だと考えている。

運動・スポーツの実践に関しては、得手不得手や好嫌の個人差に鑑み、学生の先入観や固定観念を打破するため、教材のルールや動作を工夫した多様な実践機会を提供している。学生が習得すべきスキルを具体的に把握できるように、ルーブリック評価表を作成した。この評価表に紐づいたワークシートを用いて、学生が自らの学びを記録・確認できるように支援している。学生には、授業を通じた気づきや学びを自己完結することなく、他者と共有・共感することを求めている。授業理解度を高めていくため、学生の毎回の振り返りの中から、全体共有したいコメントを選び、そのコメントを活用しながら授業内容の要点を解説している。

興味との調和や経験との接続を意識した授業を運営する中で学生が自身の成長を感じ取る機会をつくり、公平な評価を可能とする仕組みを通して、内発的な満足感を高める授業を実践していきたい。

「保育者養成校における身体表現系授業の取組」

高原和子氏

子どもが元来持っている内なる表現する力をさらに豊かにし、想像から創造へ広げ、深めていくには、保育者の適切な援助が重要である。この保育者の適切な援助とは何か。保育者養成校において様々な模索が行われてきた。筆者もこの課題に対する検証を行いつつ、その成果を実際の授業に取り入れている。

身体表現の授業では、まず実際に身体表現活動を体験する。とにかく身体表現は、「指導が難しい」「人前では恥ずかしい」と思われ、学生も始めは消極的である。それを払拭するには、まず「教員自身が動いてみせる」ことが大切で、教員があえて「一番恥ずかしい動きを実践する」ことで、学生に「自分のイメージで動いても良い気楽さ」を感じさせることが肝要と考えている。このことは、幼児の身体表現活動の指導にもつながっていく。

その一方で、身体表現活動の意義を示し、幼児の身体表現活動の重要性を実体験とその解説（理論）とで説いていく。このように授業では、段階を踏まえた保育者の援助の方法を実践し、学生自身が体験的に学ぶように構成している。そして最終段階では、模擬保育や実際の幼児を対象とした幼児指導を実施する。この指導実践における特徴は、実施後の振り返りを丁寧に行うことにある。グループや全体での討議を繰り返し、時間をかけ十分に行うことは学生の指導力の向上につながっている。

これら一連の流れが身体表現の指導法を学ぶ上では必要不可欠であると考えている。

10. ラウンドテーブル・ディスカッション
「九州体育・スポーツ学会」
「九州地区大学体育連合」合同企画

ラウンドテーブル・ディスカッション

「九州体育・スポーツ学会」「九州地区大学体育連合」合同企画

「教養体育」授業担当資格の認定に向けて

話題提供 : 則元志郎 (熊本大学名誉教授)

企画・司会 : 則元志郎 (九州地区大学体育連合顧問)

齊藤篤司 (九州体育・スポーツ学会大会企画委員長)

1. 企画趣旨

大学教員の主な仕事は、教育と研究であることは言うまでもない。教育に関しては、大きく「専門教育」(学部・学科等)と「教養体育」(一般体育、共通教育等)を担当している。そして、多くの教員は、各自の専門研究の実績で採用されたり、昇格したりしている。「専門教育」に関しては、各々の研究実績が「授業担当資格」に大きく関わる。しかし、「教養体育」の授業担当資格を問われた時、その証明に値するものを持っている教員は少ない。特に最近では、心身の健康・運動技能・運動文化などの指導等だけでなく、ディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーに対応した指導内容や方法、汎用的スキル(コミュニケーションスキル、社会的スキル等)を獲得させる指導力が求められている。

そこで、「教養体育」授業担当資格を大学体育に関して研究・研修している機関・組織(九州地区大学体育連合)において認定する方向を検討する。

2. 検討内容

これまで、本合同企画は、大学体育授業に関する実技研修を行ってきたが、今回は、「教養体育」の授業担当教員の資格認定に関する検討の端緒として、ラウンドテーブル形式で意見交換が行われた。

まず、話題提案者(九州地区大学体育連合前会長)より、企画の趣旨説明が行われた。その内容は、「教養体育」の授業を担当する教員の資格認定を行うことが

期待され、九州地区大学体育連合がその母体となることが望ましい、というものであった。説明では、「学部等では、専門科目にかかる研究業績や教育経験等を踏まえて教員採用が行われているが、教養教育における教育能力等については、あまり問われることがない。その一方で、教養教育の理念や目的の現代化に伴い、教養教育授業担当者に求められる能力等も、多様化・高度化している」という現状を踏まえ、公的団体等が公認する資格を作る必要がある、ということが主張された。このような資格の認定は、大学体育教員を目指す若手研究者のメリットになり(例えば、履歴書等に記載することができる)、また、中堅・ベテラン教員にとっても自己研鑽につながることを期待される、とも述べられた。

これらの提案の後、質疑応答および意見交換が行われた。複数の参加者から、資格の制定に賛同する意見が述べられたが、認定の仕方や資格の質の担保等(提案では、「認定委員」による、研修会での研究発表や模擬授業に対する審査が必要とされている)、クリアすべき課題が多数あり、必要性は理解できるものの、慎重に検討すべきとの意見も出された。九州地区大学体育連合としては、今後も、調査や議論を進め、課題を整理した上で、実現の可能性を探ることとなった。

11. スチューデント・セッション

ボードゲームを活用した集中力のトレーニング

話題提供者：河津 慶太（九州大学大学院 学術協力研究員）

企画・司会：相羽 枝莉子（九州大学大学院・北九州市立大学） 齊藤 篤司（九州大学）

1. 企画趣旨

本企画では、研究の成果をアスリートのサポート現場に還元することを目的とした活動を行っている、もしくは今後行いたいと考えている学生が、その活動に生かすことのできる話を提供できるような企画を目指した。現在、東京 2020 パラリンピック競技大会を目指すパラアスリートに対するメンタルのサポートを行っている河津氏に「現場でアスリートに対して実践している集中力のトレーニング」について、実際に参加者の皆さんに体験していただきながら、ランチョンセミナー形式でプレゼンテーションをしていただいた。感想の発表や、質疑応答の時間も設けながら、フロア全体でボードゲームの有用性について考えた。

2. 発表要旨

まず、河津氏に「集中力とは何か」について講義をしていただいた。さらに、参加者の皆さんでワークシートを使用していただきながら、「ハリガリ」というボードゲームを実際に体験し、参加者も、自身の注意・集中の状態について振り返ることができるようにした。

ワークシートでは、ハリガリをする際に「どのような戦略をたてていたか」、「うまくいった時、いかなかった時の注意の状態」について振り返る時間を設けた。その後、ハリガリにおける戦略や、試合でうまくいった（いかなかった）時の注意について振り返り、その後ハリガリを再実践してもらうことで、ボードゲームの現場への活かし方について学んだ。

3. ディスカッション

参加した大学院生や学部生から、「ボードゲームは、クローズドスキルにおいても効果的か」、「ジュニアの選手を対象にしたメンタルトレーニングでも、ボードゲームを活用できるか」などの質問がなされ、いずれも、実践現場で活用するための具体的な方法に関する質疑が行われた。

さらに、現役の学部生自身が「競技場面で困っていること」についての質問も寄せられ、心理的側面、主に集中力のトレーニングの側面から、課題解決にあたって河津氏からアドバイスを教示していただき、フロア全体で、集中力の重要性を共有することができた。

4. まとめ

本企画は、将来、研究の成果をアスリートのサポート現場へ還元していく学生にとって、有意義な企画であった。研究の現場で得られた知見や理論は、現場にそのまま持っていくことは困難であり、アスリートが試合で実力を発揮するために特に重要な心理的競技能力である注意集中、自己コントロール能力も理論などを口頭で伝えても、そこに体験が伴わないと選手や指導者に受け入れてもらうことは困難である。そこで、選手や指導者に理論を実感してもらうため、ボードゲームの活用が期待される。

本企画は、河津氏がボードゲームの活用法や、競技場面で期待できる効果を示していただき、フロアの皆さんと一緒に、現場で求められる研究者のアプローチの仕方について学び、考えるよい機会となった。

九州体育・スポーツ学会
第68回大会報告

九州体育・スポーツ学会 第68回大会報告

大会実行委員長 西 谷 憲 明 (鹿児島国際大学)

2019年8月31日(土)から9月1日(日)の2日間、鹿児島大学 郡元キャンパス(鹿児島市)を会場として、九州体育・スポーツ学会第68回大会が開催された。以下に大会の概要等について報告する。

1. 日 程

8月31日(土)(1日目)	
8:30~	受付
8:30~9:40	理事会
10:00~12:00	一般研究発表(口頭発表)
12:00~13:10	昼休み・会議(若手優秀発表賞選考関連会議)
13:10~14:20	特別講演
14:30~16:30	全体シンポジウム
16:40~17:40	総会
18:00~20:00	全体情報交換会

9月1日(日)(2日目)	
8:30~	受付
9:00~10:00	研究推進委員会企画セッション トピック・セッション1
10:10~12:10	専門分科会シンポジウム(総会含む)
12:20~13:20	(すべてランチョン *昼食をご持参ください) ラウンドテーブル・ディスカッション 〔「九州体育・スポーツ学会」・「九州地区大学体育連合」合同企画〕 トピック・セッション2 スチューデント・セッション
13:30~15:00	一般研究発表(ポスター発表)
15:00	学会大会終了
15:10~	九州地区大学体育連合理事会

2. 総 括

今回の大会は、諸行事との関係で事務局を鹿児島国際大学が担当し、会場を鹿児島大学にお願いして県内の学会関係者を中心として開催の準備を進めた。前回大会から始まった2日間開催の形式を踏襲して成功裏に終了することができた。大会の事前登録参加者は102名であり、当日参加者は70名の合計172名の参加者であった。また、各セッションを含む発表演題数は67演題であった。

申し込み締め切りの6月3日の参加申込者数65名、発表申し込み演題数35演題数を踏まえ、6月18日まで締め切りを延期することを6月5日に発信した。7月6日の第4回総務委員会に印刷業者に送付する大会プログラム原稿(一部未定)を提示して最終確認をした。校正の3校が終了し念校を発信したのが8月9日になったため、印刷がお盆明けとなり大会プログラム発送が22日予定となった。そこで、8月10日付で大会プログラム(全体)と発表テーマ一覧を全会員に添付ファイルで送信した。

今学会の特別講演では、武隈晃氏(鹿児島大学副学長)による「障害者スポーツのこれまでとこれから—体育・スポーツ経営学の視座—」と題した講演を実施した。また、全体シンポジウムでは池田敦司氏(仙台大学、大学スポーツ協会専務理事)・小林勝法氏(文教大学、大学スポーツ協会理事)、橋本公雄氏(熊本学園大学)をシンポジストに「大学スポーツ協会(UNIVAS)発足で何が変わるか、変わったか?」と題して活発な議論が交わされた。さらに、ポスター発

表では、前半後半に分け2部構成のスタイルで行った。発表者と参加者や参加者同士の熱心な意見交換が時間いっぱい行われていた様子が印象深い。大会2日間を通して、各会場共に発表者と参加者の間で活発な議論が行われていた。

大会にあたり、ご支援いただいた学会事務局、理事会並びに情報提供いただいた前大会の実行委員の関係者に感謝する。最後に、ご多忙の中、今大会のために時間を割いていただいた県内実行委員並びに大会スタッフの協力により学会大会を成功裏に閉会できたことに対して、この場を借りて御礼申し上げる。

なお、今大会の運営で気づいた点を今後の検討課題として以下にまとめる。

- ・本学会大会の日程を日本体育学会の開催日時との関連で決定する関係から、8月後半に次年度開催県での当番大学を決定する運びとなるが、諸大学の内外諸行事との関連で開催が難しい場合もあり、2年前には事前に担当県に投げかける段取りが取れば、組織体制の見通しや対外行事との調整も図りやすいと思われる。
- ・研究発表者については、4月に配信した大会要項の「研究発表申し込み資格」に「演者、共同研究者（当日参加しない者も含む）とも会員（2019年度年会費を納入済み）であり、第68回大会参加費を納めた者」と案内したが、混乱が生じたので「研究発表申し込み資格」について周知徹底を図る必要があると思われる。
- ・昨年から2日間開催であるため、全企画を2日間に収めるための工夫として、2日目昼休み企画をランチオン形式としているが、大会プログラムスケジュールにも明記したこともありスムーズに進行した。
- ・今大会の発表演題数が過去10年間で最も少ない結果であったことは、日本体育学会開催との間が2週間であったことも大きな要因として考えられる。
- ・大会プログラムの発送が遅れたことにより会員の皆様にはご迷惑をおかけしてしまった。
- ・各会場の参加者数を把握する体制が取れなかったため、各企画の参加者数を掲載できなかった。

九州体育・スポーツ学会大会 発表演題数の推移（2010年～2019年）

回	開催年	開催場所	一般発表演題数	口頭発表数	ポスター発表数	発表者(教員他)	発表者(学生)	特別講演	全体シンポジウム		分科会シンポジウム		スチューデント・セッション		助成研究等		ラウンドトピックセッション等		総演題数
									テーマ	演題数	テーマ	演題数	テーマ	演題数	テーマ	演題数	テーマ	演題数	
59	2010	鹿児島女子短期大学	59	27	32	27	32		1	3	4 2,4合同	10	1	3	2	4	1	3	82
60	2011	名城大学	80	48	32	50	30		1	4	4 2,4合同	8	1	2	1	1	-	-	95
61	2012	宮崎公立大学	59	32	27	44	15		1	3	4 2,4合同	10	1	2	1	2	-	-	76
62	2013	九州共立大学	94	34	60	59	35		1	3	4 2,4合同	8	1	2	1	2	3	11	120
63	2014	別府大学	76	36	40	49	27	1	1	3	4 2,4合同	7	1	1	1	3	4	11	102
64	2015	西九州大学	74	34	40	39	35	1	1	4	4 2,4合同	9	1	3	1	1	8	15	107
65	2016	長崎国際大学	88	39	49	60	28	1	1	3	4 2,4合同	7	1	3	1	1	9	19	122
66	2017	福岡大学	70	38	32	50	20	1	1	3	4 2,4合同	12	1	2	1	3	5	12	103
67	2018	熊本学園大学	53	26	27	35	18	1	1	3	5	14	1	3	1	2	6	14	90
68	2019	鹿児島大学	50	21	29	41	9	1	1	3	3 1,5合同 2,4合同	7	1	1	2	2	3	3	67

九州体育・スポーツ学会事務局ニュース（2019年度第1号）

九州体育・スポーツ学会事務局

2019年度 第2回総務委員会議事録

日 時：2019年8月30日（金） 16：00～18：00

場 所：鹿児島大学郡元キャンパス 稲盛アカデミー A12講義室

出席者：磯貝会長，齊藤副会長，高瀬理事長，古村大会実行副委員長，福満大会実行委員，宮内事務局長，
日高庶務担当，正野会計担当

欠 席：杉山副会長，檜垣副会長

磯貝会長挨拶

【報告事項】

1. 大会企画委員会
特になし
2. 研究推進委員会報告
特になし
3. 編集委員会
特になし
4. 事務局報告
宮内事務局長より，抄録原稿を事務局に提出することになっているが，届いていない発表者がいること（8月30日締め切り）などが報告された。
5. 会員動向について
日高庶務担当より資料に基づいて会員動向について報告があった。2017年と2018年の両年とも年会費未納の会員を省いた人数が報告された。
6. 大会準備状況について
古村大会実行副委員長より，大会の準備状況について報告があった。発表演題数が69に留まったが，日程が早まったことや他学会との重なり等も影響したのではないかという意見も述べられた。
7. その他
会長より，厨先生の訃報に際して，香典を届けた旨の報告がなされた。

【議 事】

1. 大会の事前打ち合わせについて
鹿児島大学の教室の使用について，使用可能時間や施設，懇親会場，託児所等について説明があった。また，シンポジストの動線や申し込み状況についても確認された。託児所の利用は1人（子ども2名）にとどまったことや，韓国語のできる学生さんを1人受付に配属したことなどが報告された。大会プログラムについては，590名に発送し，残部が60部程度であることも報告された。
2. 共同研究者の登録に関する覚書の一部改定について
高瀬理事長より資料に基づき，発表演題数を増やすための，特別共同発表者申請書の扱いについて簡素化する改定の提案がなされた。字句の訂正等をして理事会に諮ることとなった。
3. 2020年度事業計画（案）について
宮内事務局長より，資料に基づき，2020年度の事業計画について提案がなされ，承認された。

4. 理事会議事確認

理事会の議事の確認がなされた。

5. 第69回大会の会場大学と開催日程について

斎藤大会企画委員長より、第69回大会は琉球大学が主管で開催することが提案され、承認された。なお、会場校・期日は未定であることが報告された。

6. その他

ポスター発表賞の新設について

会長より、ポスター発表賞の新設について提案があった。ポスター発表に対する賞を設けることについて承認され、理事会に諮ることが確認された。

2019年度 理事会議事録

日 時 令和元年8月31日（土） 8時30分～9時40分

場 所 鹿児島大学 稲盛アカデミー 1階 A12 講義室

出席者：磯貝会長，杉山副会長，檜垣副会長，斉藤副会長，高瀬理事長，池上理事，下園理事，高柳理事，田原理事，西田理事，東恩納理事，兄井理事，高原理事，瀧理事，森理事，中島理事，宮内事務局長，日高庶務担当，正野会計担当

欠席者（委任状あり）：熊谷理事，宮林理事，伊藤理事，田中理事，山口理事

磯貝会長挨拶

西谷大会実行委員長挨拶

【報告事項】

1. 2018年度～2019年度の活動報告

1) 総務委員会報告

高瀬理事長より、第1回、第2回の総務委員会を開催したことが報告された。また、会員が減ってきていることに対する危惧が表明され、会員増につながる方策を総務委員会で検討していきたいとの発言があった。

2) 大会企画委員会報告

斎藤大会企画委員長より、大会開催にあたっての関係各位の尽力に対して感謝の意が表明された。また、演題数が減ってきていることへの危惧が述べられた。

3) 研究推進委員会報告

杉山研究推進委員長より、論文賞，研究助成，若手発表賞の審査員の選考をしたことが報告された。

4) 編集委員会報告

檜垣編集委員長より、採択された論文を早期公開するようにしたことが報告された。

5) 事務局報告

宮内事務局長より、会員の名簿を規約に沿って整理したこと，抄録の提出が済んでいない会員のいることが報告された。

6) その他

特になし

2. 会員動向

日高事務局庶務担当より、資料に基づき、会員動向について報告があった。規約に基づき2017年と2018年の両年とも年会費が未納のものを省いて処理した会員数が提示された。

3. 日本体育学会地域協力学会連絡会議報告

高瀬代議委員より、日本体育学会地域協力学会連絡会議の報告がなされた。会員が減少している学会も多く、存続のための方策を検討しているところもあるとの報告がなされた。

4. その他

会長より、厨先生の計報に際して、香典を届けた旨の報告がなされた。

【議題】

1. 学会賞（論文賞）について

杉山研究推進委員長より資料に基づいて説明があり、奨励論文賞は対象なし、および、優秀論文賞は該当なしとの選考委員会の結論が提案され、原案のとおり承認された。

2. 研究助成について

杉山研究推進委員長より資料に基づき、研究助成についての審査の方法と過程について説明があり、総務委員会での検討結果が提案された。すなわち、人文社会科学分野1件（八尋風太氏、15万円）と自然科学分野1件（砂川力也氏、15万円）の採択について提案され、原案のとおり承認された。

3. 若手優秀発表賞について

杉山研究推進委員長より口頭にて、若手優秀発表賞に対して5名の申請があったことが報告され、午前中に申請者の発表を審査することになっており、その後、臨時審査会で検討し決定することになることが確認された。

4. 機関誌の編集について

檜垣編集委員長より口頭にて、34巻第1号の発刊を予定していることが報告され、原著2編、68回の発表抄録、大会抄録、大会のまとめ、事務局ニュースの構成で発刊の予定であることが報告された。

また、杉山研究推進委員長から、学会助成を受けた方は論文を発表することになっているので、その旨を本人には連絡済であること、および、助成を受けた方の抄録の提出を求めたい旨の発言があった。

5. 功労賞・名誉会員について

高瀬理事長より資料に基づき、学会功労賞・名誉会員について、3月の総務委員会で検討をし、該当者なしとなったことが提案され、原案の通り承認された。

6. 2018年度会計決算（案）について

正野会計担当から資料に基づき、2018年度会計決算について説明がなされ、大石監事より監査の報告がなされた。審議の結果、承認された。

7. 2020年度事業計画（案）について

宮内事務局長より資料に基づき、2020年度事業計画について提案がなされ、承認された。

8. 2020年度予算案について

正野会計担当から資料に基づき2020年度予算案について提案がなされ、承認された。

9. 特別共同発表者の扱いについて

高瀬理事長より資料に基づき、学会大会の開催に関する覚書の一部改定について提案がなされた。発表演題数を増やすために、特別共同発表者申請書の扱いについて簡素化する改定の提案がなされた。

種々の意見が出され、運用は始めることで合意されたが、詳細については、メール会議も含めて、継続して検討することとなった。

10. ポスター発表賞の新設について

磯貝会長から口頭により、ポスター発表賞の新設について提案があった。口頭発表だけでなく、ポスター発表に対する賞を設けることについて検討を始めることが承認された。また、具体的な運用は研究推進委員会で検討することも承認された。

11. 学会抄録の機関誌への掲載方法について

磯貝会長より昨年度の総会において出された意見について、総務委員会で検討した結果、発表抄録の機関紙への掲載は予算の関係上難しいことから、現在のようにネットでの公開にしたい旨の提案があり、承認された。ただ、検索ができるようにしていくことも確認された。さらに、補遺版に目次をつけてほしいとの要望があった。

12. 第69回大会の会場大学と開催日程について

齊藤企画委員長から、第69回大会は琉球大学が主管で開催することが提案され、承認された。なお、会場校・期日は未定であることが報告された。

13. 第70回大会について

磯貝会長より、70回大会は、順番では宮崎だが福岡で開催すること、および記念誌の発刊等については委員会を作って検討していくことが提案され、承認された。

14. その他

特になし

2019年度 総会議事録

日 時 令和元年8月31日（土）16時40分～17時40分

場 所 鹿児島大学 稲森会館

大会会長 挨拶

学会会長 挨拶

【報告事項】

1. 2018年度～2019年度の活動報告

1) 総務委員会報告（高瀬理事長）

高瀬理事長より、2回の総務委員会を開催したことが報告された。また、会員増につながる方策を総務委員会で検討していきたいとの発言があった。

2) 大会企画委員会報告（斎藤大会企画委員長）

斎藤大会企画委員長より、大会開催にあたっての関係各位の尽力に対して感謝の意が表明された。また、演題数が減ってきていることへの危惧が述べられた。

3) 研究推進委員会報告（杉山研究推進委員長）

杉山研究推進委員長より、論文賞、研究助成、若手優秀発表賞の審査をしたことが報告された。

4) 編集委員会報告（檜垣編集委員長）

檜垣編集委員長より、採択された論文を早期公開するようにしたことが報告された。

5) 事務局報告（宮内事務局長）

宮内事務局長より、会員の名簿を規約に沿って整理したこと、抄録の提出が済んでいない会員のいることが報告された。

6) その他

特になし。

2. 会員動向：事務局（日高庶務担当）

資料に基づき会員の動向が報告された。規約に沿って2017年、2018年の両年とも年会費を納めていない者を省いた結果、総数が467名に整理されたことが報告された。

3. 学会賞（論文賞）について（杉山研究推進委員長）

選考委員会、総務委員会、理事会を経て、奨励論文賞は「対象なし」、および、優秀論文賞は「該当なし」に決定したことが報告された。

4. 研究助成について（杉山研究推進委員長）

選考委員会、総務委員会、理事会を経て、以下の2件が決定したことが報告された。

<人文社会科学分野>

研究代表者：八尋風太（鹿屋体育大学大学院）

研究テーマ：運動部活動の顧問における二側面のアイデンティティと精神的健康度の関連

<自然科学分野>

研究代表者：砂川力也（琉球大学）

研究テーマ：Velocity Based Training における最適な速度領域に関する研究

5. 若手優秀発表賞について（杉山研究推進委員長）

選考委員会，総務委員会，理事会での審議を経て，八尋風太（鹿屋体育大学大学院），亀田麻依（国立スポーツ科学センター），吉田理沙（（株）健康科学研究所）の3氏に決定したことが報告された。

6. 功労賞・名誉会員について（高瀬理事長）

功労賞について，本年度は「該当者なし」とすることが，総務委員会，理事会を経て決定されたことが報告された。

7. 特別共同発表者の扱いについて（高瀬理事長）

発表演題数を増やすために，特別共同発表者申請書の扱いについて簡素化する改定を行うことが報告された。

8. 日本体育学会地域協力学会連絡会議報告（高瀬代議員）

日本体育学会地域協力学会連絡会の報告がなされた。どの地域学会においても会員数の減少があり，100名を下回る場所は合併することも検討されている旨の報告がなされ，会員数増加のための取り組みが課題であることが述べられた。

9. 学会抄録の機関誌への掲載方法について（磯貝会長）

昨年の総会時に学会抄録を冊子にしてはどうかという提案をうけて，総務委員会，理事会で審議をしたが，検索ができるようにするなどのHPの充実を図っていきながら，現状維持とすることが決定されたことが報告された。

10. その他

磯貝会長より，厨先生へのお悔やみを届けたことが報告された。

【議題】

1. 2018年度会計決算（案）について

正野会計担当より資料に基づき説明がなされ，その後，大石監査より，適正に管理運営されていたことが報告され，一般会計，特別会計ともに原案通り承認された。

2. 2020年度事業計画（案）について

宮内事務局長より資料に基づいて提案がなされ，原案通り承認された。

3. 2020年度予算案について

正野会計担当より資料に基づいて一般会計，特別会計について提案がなされ，原案通り承認された。

4. 第69回大会の会場大学と開催日程について

磯貝会長より来年は沖縄県が当番県であり，琉球大学を主管にして開催することが提案され，承認された。また，会場校と開催期日については今後，検討していくことが報告された。なお，理事会案としては2020年9月の4連休の時期が適切ではないかということも伝えられた。その後，次期大会実行委員会から挨拶があった。

5. 第70回大会について

磯貝会長より70回大会の開催県について，本来であれば宮崎県のところを福岡県開催にしたい旨の提案があり，承認された。

6. ポスター発表賞の新設について

磯貝会長より，ポスター発表賞を新設したい旨の提案があり，研究企画委員会で検討後，来年の総会で決定することが承認された。

7. その他

檜垣編集委員長より学会誌への投稿を積極的に行ってほしい旨の依頼があり，投稿の手順等について確認された。

【表彰】

若手優秀発表賞，会場大学の鹿児島大学に対して表彰が行われた。

◆九州体育・スポーツ学会第69回大会について◆

2020年度の学会大会は、名桜大学を会場として開催されます。会期は2020年9月19日（土）、9月20日（日）となる予定です。多くの方の参加をお待ちしています。

◆会費納入について◆

日本体育学会会員の会費は自動引き落としになっていますが、本学会のみの会員の会費は個別に振り込んでいただくことになっています。本年度会費をまだ入金されていない方は、早急に下記の学会口座まで振り込みをお願いします。

<振込先>

【ゆうちょ銀行からの振り込みの場合】

郵便振替番号：17310-21783811

加入者名：九州体育・スポーツ学会

【他の金融機関からの振り込みの場合】

ゆうちょ銀行 口座名：九州体育・スポーツ学会 店番：七三八（読み ナナサンハチ）店名：738

預金種目：普通預金 口座番号：2178381

◆会員情報の変更について◆

所属の異動や転居などに伴い、会員登録情報に変更のあった方は速やかに学会事務局までメールにてご連絡ください。変更手続きは基本的にメールで行っています。また、退会される場合もご連絡ください。会員情報の調査・整理作業の必要性が指摘されております。特に卒業、修了後の学生を対象とした情報を把握したいと考えておりますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

<学会事務局宛てメールアドレス：kyutai.office@gmail.com >

編集後記

九州体育・スポーツ学研究第34巻第1号をお届けします。会員の皆様におかれましては本誌に積極的に論文投稿をいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。今後も、皆様のご研究の成果を本誌より広く発信いただけますよう、よろしくお願い致します。

さて、本誌は年2号の発刊を予定しておりますが、昨年度は33巻第1号のみとなりました。従いまして、採択済みの論文の紙面での公開が遅れましたこと、深くお詫び申し上げます。採択された論文は、できる限り早急に公開するため、現在はホームページにおいて早期公開のシステムを導入致しました。採択論文の校正が完了次第、九州体育・スポーツ学会 HP (<http://webpages.ihs.kyushu-u.ac.jp/ktsm/>) →学会誌→早期公開論文にて公開しております。どうぞ、宜しくお願い致します。

最後に、教育・研究そして大学運営などお忙しいところ、査読をご担当いただいた先生方には、迅速な対応をいただきました。ここに、深く感謝申し上げます。

(Y.H.)

編集委員会

檜垣靖樹(委員長) 伊藤友記 山口幸生 田中守
中島憲子

Editorial Board

Y. Higaki (Editor-in-Chief) T. Ito Y. Yamaguchi M. Tanaka
N. Nakashima

令和2年1月20日 印刷
令和2年1月24日 発行

非売品

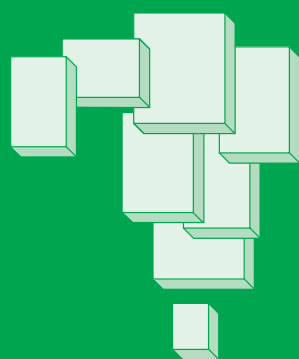
発行者 磯貝浩久

発行所 九州体育・スポーツ学会

所在地 〒889-2192 宮崎県宮崎市学園木花台西1-1
宮崎大学教育学部内
九州体育・スポーツ学会事務局
事務局代表者 日高正博
Fax 0985-58-7557
E-mail kyutai.office@gmail.com

郵便振替 1. 総合口座
(ゆうちょ銀行からの振り込み受取口座)
ゆうちょ銀行総合口座
番号 17310-21783811
名称 九州体育・スポーツ学会事務局
2. 他行からの振り込み受取口座
ゆうちょ銀行
(店名738, 店番738)預金種目:普通預金
番号 2178381
名称 九州体育・スポーツ学会事務局

印刷所 城島印刷株式会社
〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6
電話 092-531-7102



Kyushu Journal of Physical Education and Sport

Contents

Original papers

- Yoshihiro Oishi, Masahiro Kageyama, Masafumi Fujii and Akira Maeda:
Differences in sprint performance of collegiate baseball players
between the early morning and evening 1

Material

- Chikako Kakoi, Takahide Matsumoto and Hirofumi Kintaka:
Proposal of “skill evaluation viewpoint structure diagram” on skill evaluation
points of creative dance and rhythm dance 9

The Abstracts of the 68th Kyushu Society of Physical Education and Sport

1. Special Lecture 27
 2. Plenary Symposium 29
 3. Separate Symposium 1 • 5 33
 4. Separate Symposium 2 • 4 35
 5. Separate Symposium 3 37
 6. Organized sessions by research promotion committee 1 39
 7. Organized sessions by research promotion committee 2 41
 8. Topic Sessions 1 43
 9. Topic Sessions 2 45
 10. Round-table discussion
 Joint Symposium of JAUPES and KSPES 47
 11. Student Session 49

Report of the 68th Kyushu Society of Physical Education and Sport 51

News 53